

「京都子ども調査」結果の概要

2017年9月

埋橋 孝文 (同志社大学社会学部)

矢野 裕俊 (武庫川女子大学文学部)

田中 聡子 (県立広島大学保健福祉学部)

目次

京都子ども調査 結果の概要

調査の概要	4
・ 調査の名称と目的	4
・ 実施対象者	4
・ 抽出方法	4
・ 実施年月	4
・ 実施方法	4
・ 回収状況	4
・ 調査回答者のプロフィール	5
・ 年間世帯収入	5
・ 本調査の実施主体	6
・ 倫理的配慮	6
・ 本調査に関するお問い合わせ	6

子ども票

I. 家族や親せきのこと	7
1. 子どもからみた親との関係	7
2. 子どもからみた家と家族	10
3. 親戚との関係	13
4. 子どもが毎月自由に使えるお金	14
5. 子どもの持ち物（複数回答）	15
II. 学校生活と習い事	18
1. 学校生活	18
2. 習い事（複数回答）	22
III. 地域でのこと	24
1. 地域行事への参加	24
2. 暇なときに行く場所	25
IV. 友人のこと	28
1. 友人	28
2. 友人との関係	30
V. 自己肯定感と人生観	32
1. 自己肯定感	32
2. 子どもの人生観	34
3. 子どもの悩み	36
4. 悩んだときの対処	38

保護者票

I. 家族の基本的な情報	41
1. 保護者の最終学歴	41
2. 保護者の職業	41
II. 子どもの教育のこと	42
1. 就学援助費	42
2. 希望教育程度	43
III. 子どもとの関係、保護者自身のこと	44
1. 子どもとの関係	44
2. 保護者の自分自身に対する意識	45
IV. 家の暮らし向き	47
1. 暮らしのゆとり	47
2. 手当・給付等	48
3. 所有物（複数回答）	48
付録	49
1. 母親の労働日数と勤務時間	49
2. 父親の労働日数と勤務時間	50

考察

集計結果の要約と示唆するもの	51
子ども票から	51
・ 親との関係について	51
・ 家族について	51
・ 子どもの「毎月自由に使えるお金」と持ち物	52
・ 学校生活について	52
・ 習い事について	52
・ 地域行事への参加について	53
・ 暇なときに行く場所について	53
・ 友人について	53
・ 友人との関係について	53
・ 自己肯定感について	54
・ 貧困、金銭、競争、将来などに関する意識について	54
・ 子どもが抱えている悩みについて	54
・ 子どもが悩んだ時の対処について	55
保護者票から	56
・ 就学援助費について	56
・ 希望教育程度について	56
・ 子どもとの関係について	56
・ 保護者の自分自身に対する意識について	56

京都子ども調査 結果の概要

この度、「京都子ども調査」の結果の概要がまとまりましたので、ここにご報告いたします。

2017年9月

埋橋孝文（同志社大学社会学部）

調査の概要

・ 調査の名称と目的

本調査は「京都子ども調査」といい、子どもを取り囲む社会や経済の状況が、どのようにして子どもの成長や夢、希望、日々の生活に影響しているかを調べ、今後の教育的働きかけのための基礎的資料を得ることを目的としています。

・ 実施対象者

京都市内の公立中学校15校の中学2年生およびその保護者

・ 抽出方法

調査対象となった学校は、京都市教育委員会事務局が市内8ブロックから1～2校、生徒数を考慮して抽出しました。

・ 実施年月

2017年1月～2月

・ 実施方法

各学級内で子ども票・保護者票をセットで中学2年生生徒に配布、家庭に持ち帰り、子ども票は生徒が、保護者票は主な保護者が記入。無記名、自記式。調査票は、子ども票、保護者票それぞれを密封し、さらにその二つの封筒を世帯ごとの封筒に密封し、学校に提出。学校は封筒を密封したまま同志社大学に郵送しました。

・ 回収状況

- ・ 対象生徒数 2494
- ・ 有効回答数 1159
- ・ 有効回答率 46.5%

・ 調査回答者のプロフィール

回収された子ども票は1159票（男子428票、女子490票、未記入241票）。

子ども票		回収数	%
有効	男子	428	36.9
	女子	490	42.3
	合計	918	79.2
未記入		241	20.8
総計		1159	100.0

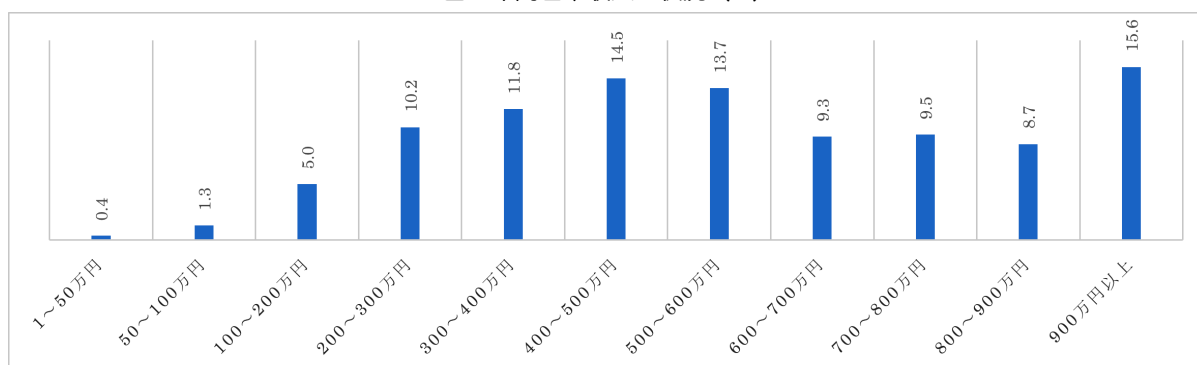
・ 回収された保護者票は1159票（母1028票、父108票、祖母4票）。

保護者票（回答した人の属性）		回収数	%
有効	母	1028	88.7
	父	108	9.3
	祖母	4	0.3
	その他	1	0.1
未記入		18	1.6
総計		1159	100.0

・ 年間世帯収入

年間世帯収入については、約5割の世帯が300～700万円の間にあります。それより上としては、約2割弱の世帯が700～900万円の間があり、900万円以上の世帯も15.6%存在します。一方で、年収が300万円未満の世帯は16.9%、200万円未満の世帯は6.1%になっています。

図 年間世帯収入の状況 (%)



以下では単純集計をしたのち、男女別、世帯収入別のクロス図（注）を掲載しています。世帯収入別とは、年間収入が300万未満、300万以上～700万未満、700万以上という3つの収入区分ごとにみたものです。

（注）本報告では男女別、収入階層別のクロス集計において、性別、収入階層とそれぞれの質問の回答との間に関連があるかどうかをみるためにX（カイ）二乗検定をおこない、p値を表や図のなかに示しています。p値が小さいほど統計的有意な差があり、通常0.05未満であれば統計的に有意な差があるとみなされます。以下では、クロス集計においてp値の表を示し、p値が0.05未満の場合のみクロス図を掲載しています。

- ・ 本調査の実施主体

本調査は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）「自己肯定感に注目した子どもの『貧困に抗う力』育成のためのサポートシステムの構築」（研究代表者 埋橋孝文同志社大学教授、平成27～29年度）の一環として行ったものです。学校や教育委員会にはアンケートの配付について協力していただきましたが、この調査は学校や教育委員会が行ったものではありません。

- ・ 倫理的配慮

本調査の実施にあたり、「人を対象とする研究計画等倫理審査」を申請し、同志社大学倫理審査委員会の承認を得た（申請者：埋橋孝文、申請番号16074、承認日2017年1月13日）

- ・ 本調査に関するお問い合わせ

同志社大学社会学部 埋橋孝文

E-mail: tuzuhash@mail.doshisha.ac.jp

子ども票

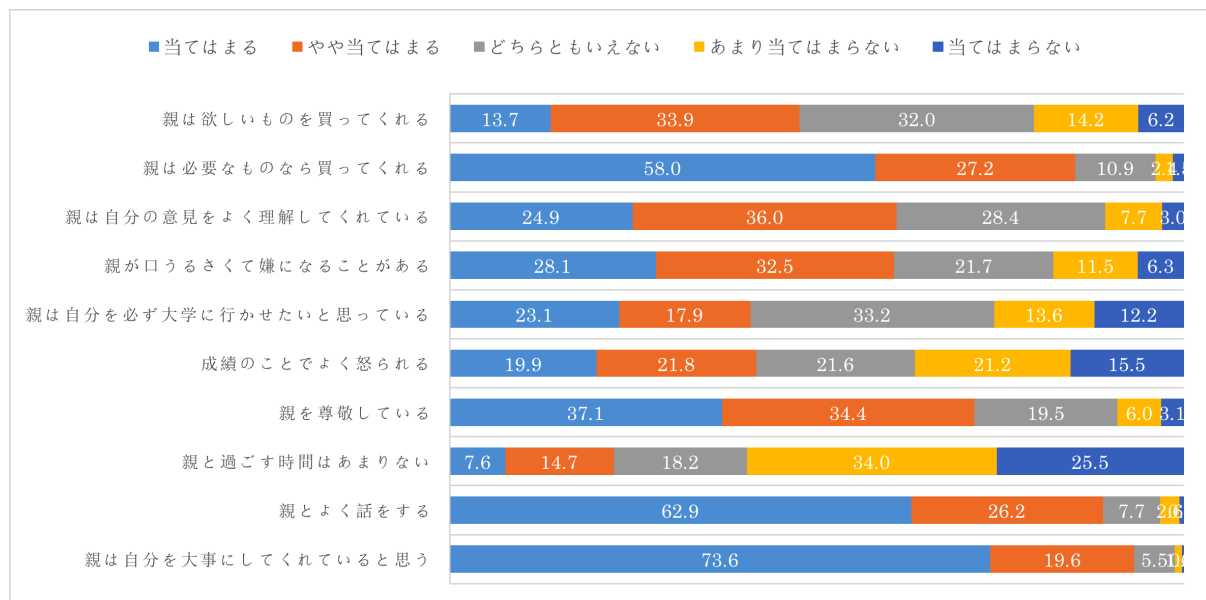
1. 家族や親せきのこと

1. 子どもからみた親との関係

子どもに自分の親との関係について10の質問を尋ねました。まず、「親は自分を大事にしてくれていると思う」について、「当てはまる」と回答した子どもが73.6%、「やや当てはまる」が19.6%でした。「親とよく話をする」については、「当てはまる」62.9%、「やや当てはまる」26.2%と答えています。この2つの項目について肯定的評価が大多数（9割前後）であることが確認されます。

「親と過ごす時間はあまりない」については22.3%の子どもが「当てはまる」「やや当てはまる」と回答しました。「親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている」について、41%の子どもが「当てはまる」「やや当てはまる」と答えました。「親は自分の意見をよく理解してくれている」については、「当てはまる」24.9%、「やや当てはまる」36%と答えた子どもがある一方、「どちらともいえない」28.4%、「あまり当てはまらない」7.7%「当てはまらない」3%と答えています。

図1 子どもからみた親との関係 (%)



「親は必要なものなら買ってくれる」について、多数の子どもが「当てはまる」と「やや当てはまる」と答えました。一方、10.9%の子どもが「どちらともいえない」、3.9%の子どもが「あまり当てはまらない」と「当てはまらない」と答えています。

上記の各項目を男女別、世帯別でみた場合、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
親は自分を大事にしてくれていると思う	0.594	0.406
親とよく話をする	0.047	0.969
親と過ごす時間はあまりない	0.004	0.117
親を尊敬している	0.155	0.273
成績のことでよく怒られる	0.000	0.642
親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている	0.000	0.000
親が口うるさくて嫌になることがある	0.481	0.513
親は自分の意見をよく理解してくれている	0.102	0.934
親は必要なものなら買ってくれる	0.013	0.136
親は欲しいものを買ってくれる	0.000	0.676

性別による回答の差をみると、「親とよく話をする」「親は必要なものなら買ってくれる」「親は欲しいものを買ってくれる」の項目について、女子のほうが男子よりも「当てはまる」と回答した割合が高くなっています。「親と過ごす時間はあまりない」「成績のことでよく怒られる」「親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている」の項目については、男子のほうが女子よりも「当てはまる」と回答した割合が高くなっています。その他の項目については、性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

図1-1 親とよく話をする (p=0.047)

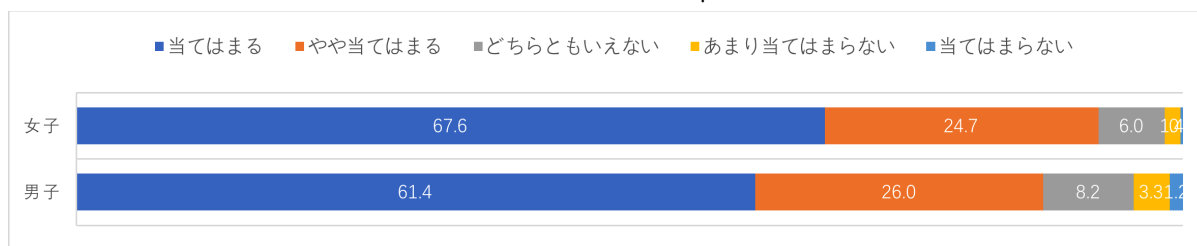


図1-2 親と過ごす時間はあまりない (p=0.004)

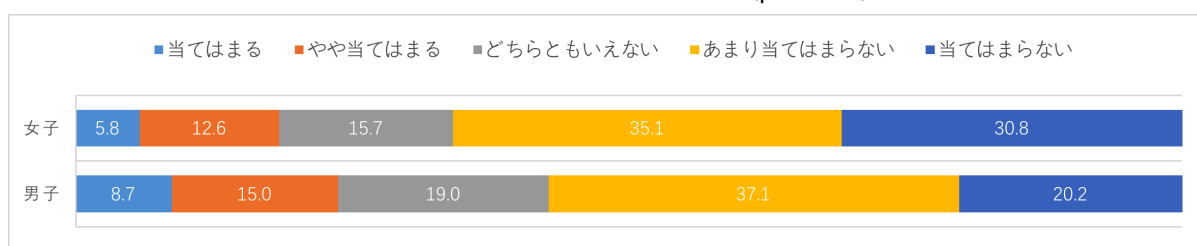


図1-3 成績のことでよく怒られる (p=0.000)

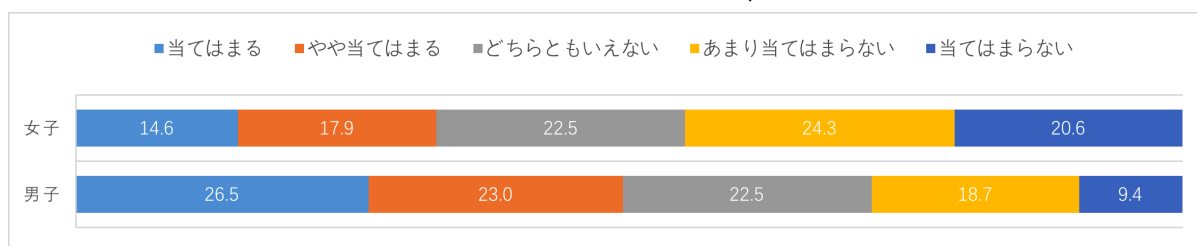


図1-4 親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている (p=0.000)

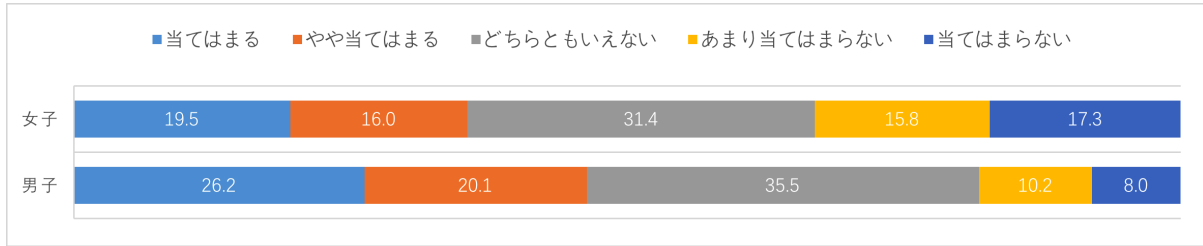


図1-5 親は必要なものなら買ってくれる (p=0.013)

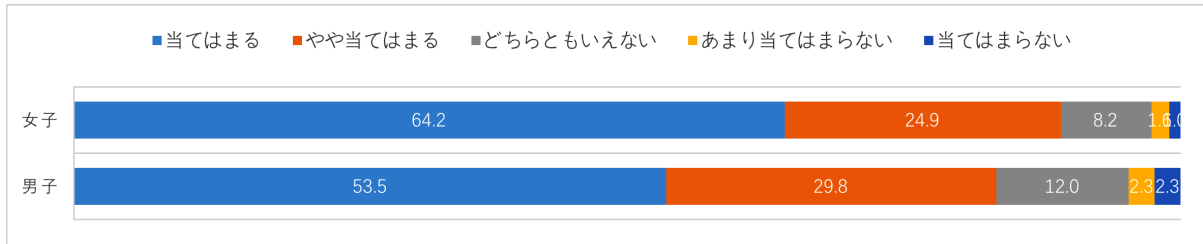
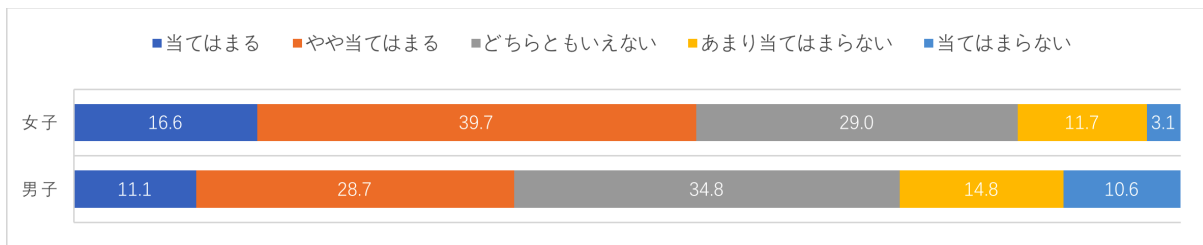
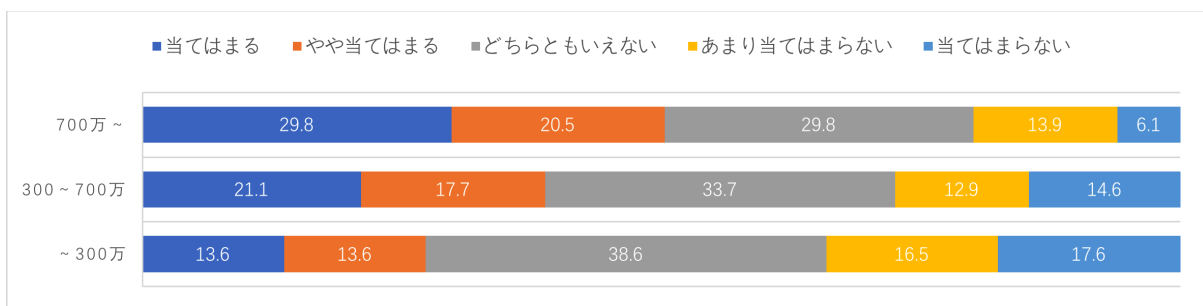


図1-6 親は欲しいものを買ってくれる (p=0.000)



世帯収入別による回答の差をみると、「親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている」について、家庭経済状況によって回答が異なりました。「親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている」について、年間世帯収入が低いほど、「当てはまる」「やや当てはまる」とした割合が低くなっています（この点については保護者票のII-2 希望教育程度も参照のこと）。その他の項目については、世帯収入による回答の差はありませんでした。全体的にみると、子どもが思っている「親子関係」には世帯の収入の高低が関係していないことを示しています。

図1-7 親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている (p=0.000)

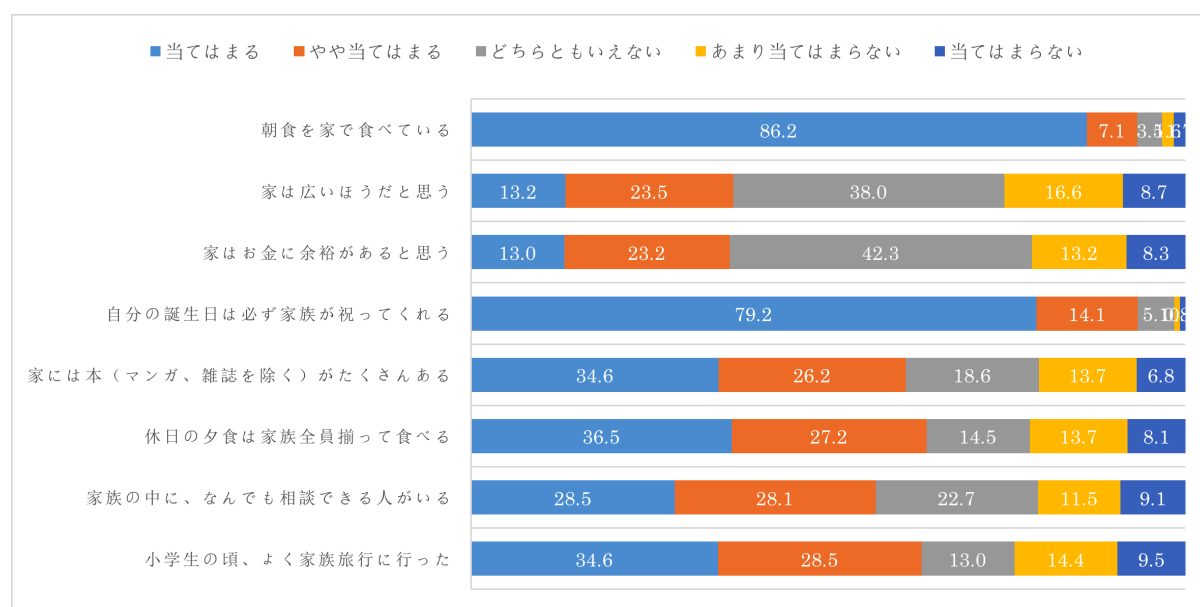


2. 子どもからみた家と家族

まず、「小学生の頃、よく家族旅行に行った」について、「当てはまる」「やや当てはまる」と答えた子どもは63.1%、「どちらともいえない」と答えた子どもは13%、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と答えた子どもは、23.9%でした。

「家族の中に、なんでも相談できる人がいる」については、「当てはまる」「やや当てはまる」と答えた子どもは56.6%である一方、「どちらともいえない」と答えた子どもが22.7%、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と答えた子どもも20.6%となります。「休日の夕食は家族全員揃って食べる」には、「当てはまる」36.5%、「やや当てはまる」27.2%と回答をしています。「朝食を家で食べている」については、少数ではあるものの「どちらともいえない」と答えた子どもが3.5%、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と答えた子どもが3.3%でした。

図2 子どもからみた家と家族 (%)



上記の各項目を男女別、世帯別で見れば、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
小学生の頃、よく家族旅行に行った	0.020	0.000
家族の中に、なんでも相談できる人がいる	0.004	0.859
休日の夕食は家族全員揃って食べる	0.003	0.460
家には本（マンガ、雑誌を除く）がたくさんある	0.006	0.000
自分の誕生日は必ず家族が祝ってくれる	0.254	0.810
家はお金に余裕があると思う	0.317	0.000
家は広いほうだと思う	0.533	0.000
朝食を家で食べている	0.242	0.557

性別による回答の差をみると、「小学生の頃、よく家族旅行に行った」「家族の中に、なんでも相談できる人がいる」「休日の夕食は家族全員揃って食べる」「家には本（マンガ、雑誌を除く）がたくさんある」の項目について、統計学的に有意な差がありました。

図2-1 小学生の頃、よく家族旅行に行った (p=0.020)

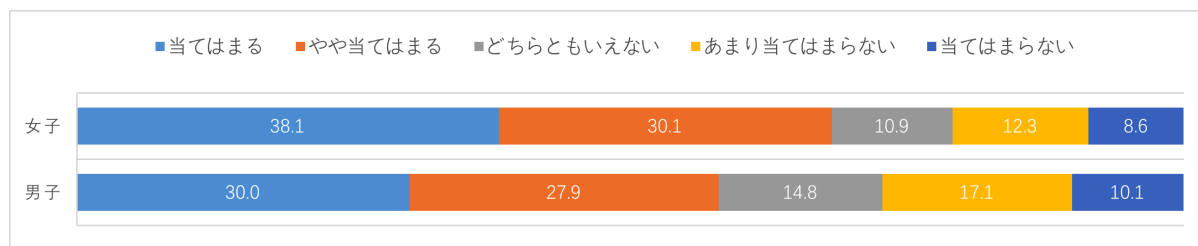


図2-2 家族の中に、なんでも相談できる人がいる (p=0.004)

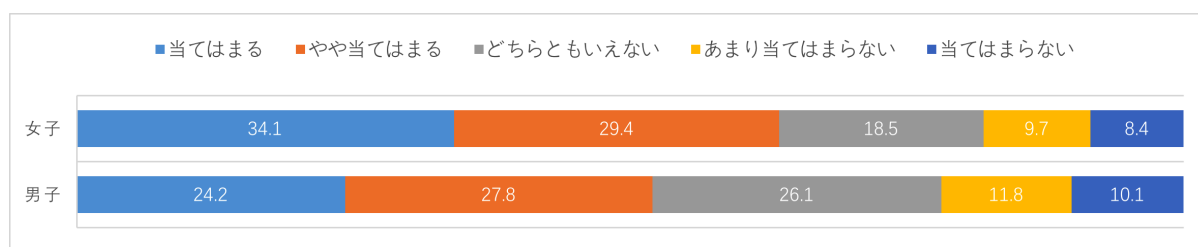


図2-3 休日の夕食は家族全員揃って食べる (p=0.003)

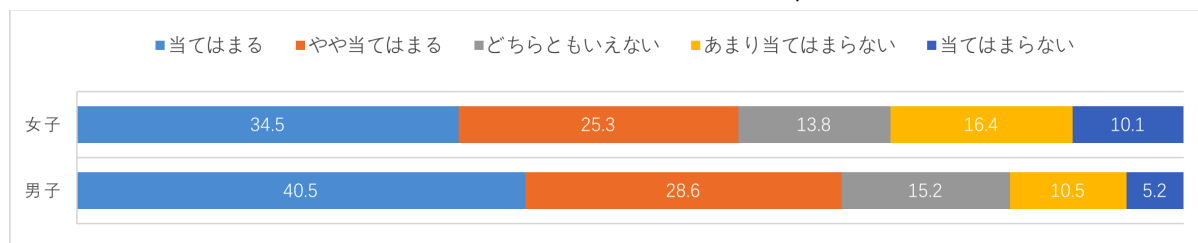
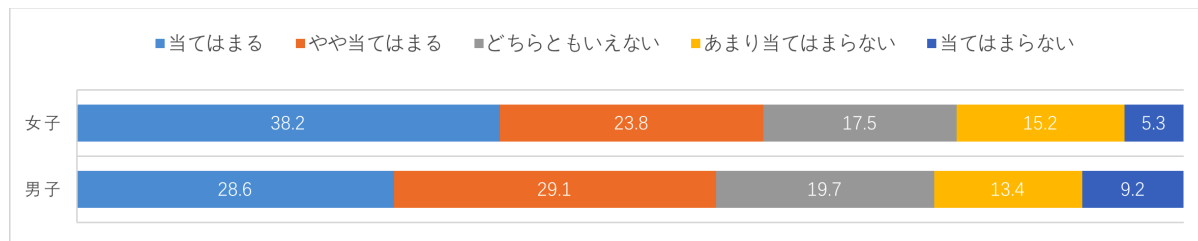


図2-4 家には本（マンガ、雑誌を除く）がたくさんある (p=0.006)



なかでも注目すべきは、「家族の中に、なんでも相談できる人がいる」については、男子は女子より「当てはまる」と回答した割合が低くなっていることです。「休日の夕食は家族全員揃って食べる」については、男子は女子より「当てはまる」と回答した割合が高くなっています。

世帯収入別による回答の差をみると、「小学生の頃、よく家族旅行に行った」「家には本（マンガ、雑誌を除く）がたくさんある」「家はお金に余裕があると思う」「家は広いほうだと思う」について、家庭経済状況によって回答が異なりました。つまり、世帯収入が高い家庭の子どもほど、それぞれの項目について「当てはまる」「やや当てはまる」の割合が多くなっています。前の2つ、つまり、家族旅行と本については、子どもにとって享受できる有意義な「機会（時間）」と「文化的資源」が家の経済状況によって違いがあるという重要な事実が明らかになったといえます。ただし、その一方で、朝食や夕食の習慣や「家族のなかに何でも相談できる人がいる」について世帯の収入の違いが影響を及ぼしていないことも注目されます。

「家族の中に、なんでも相談できる人がいる」と「休日の夕食は家族全員揃って食べる」の2つの項目は、世帯収入によって回答に有意な差はありませんでした。

図2-5 小学生の頃、よく家族旅行に行った (p=0.000)

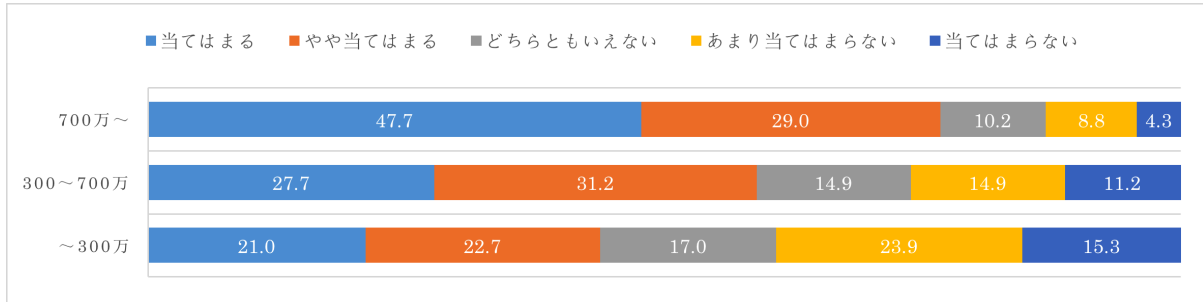


図2-6 家には本（マンガ、雑誌を除く）がたくさんある (p=0.000)

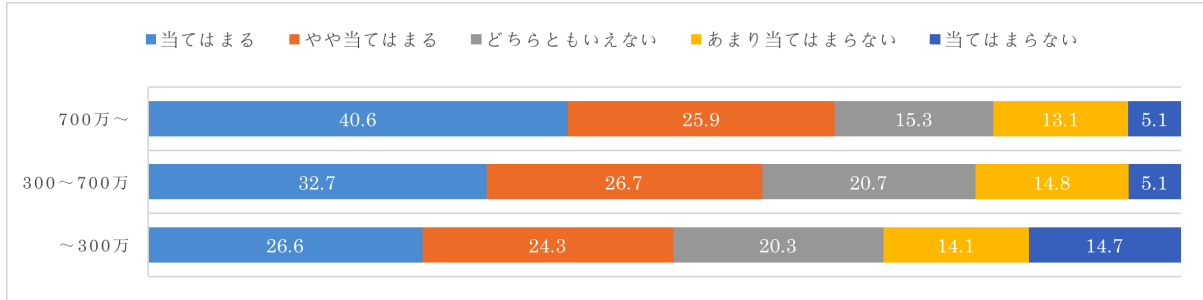


図2-7 家はお金に余裕があると思う (p=0.000)

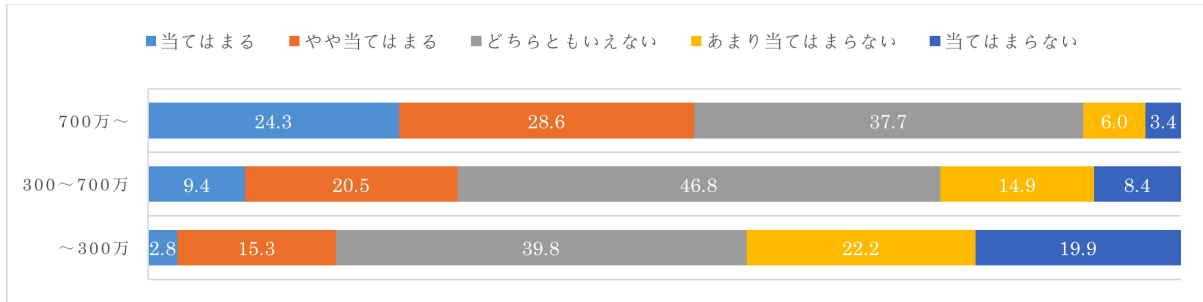
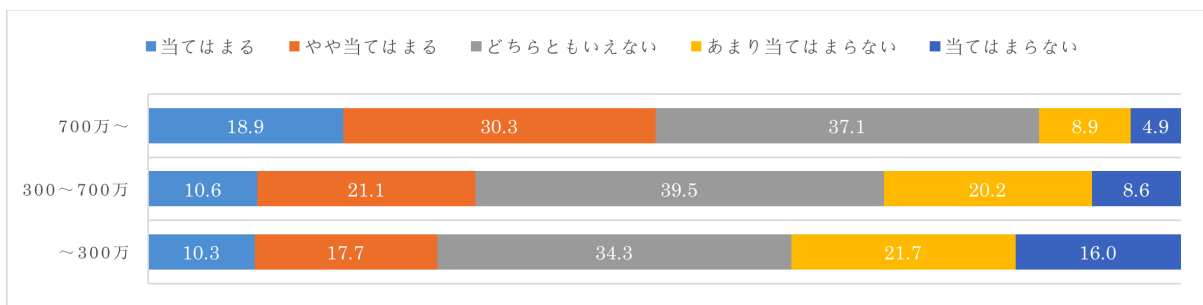


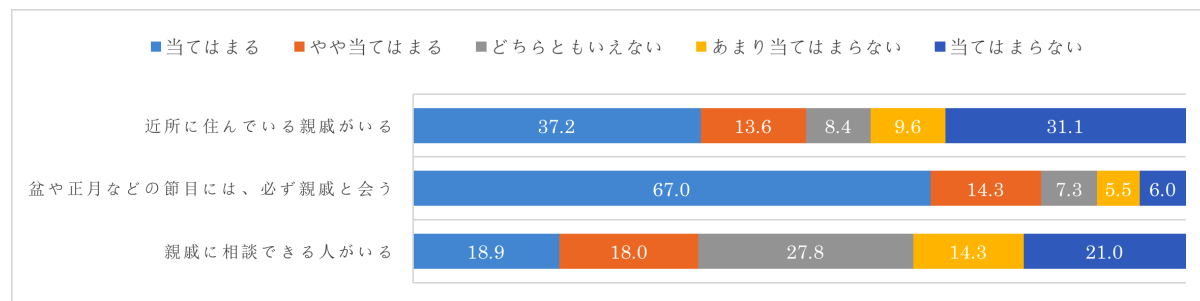
図2-8 家は広いほうだと思う (p=0.000)



3. 親戚との関係

子どもに親戚との関係について3つ質問（「近所に住んでいる親戚がいる」「盆や正月などの節目には、必ず親戚と会う」「親戚に相談できる人がいる」）を尋ねました。

図3 親戚との関係（%）



まず、「近所に住んでいる親戚がいる」には、「当てはまる」37.2%、「やや当てはまる」13.6%、「どちらともいえない」8.4%、「あまり当てはまらない」9.6%、「当てはまらない」31.1%と回答をしています。次に、「盆や正月などの節目には、必ず親戚と会う」については、約8割の子どもが「当てはまる」「やや当てはまる」と答えています。

「親戚に相談できる人がいる」には、36.9%の子どもが「当てはまる」「やや当てはまる」と答えている半面、27.8%の子どもが「どちらともいえない」、35.3%の子どもが「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と答えています。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
近所に住んでいる親戚がいる	0.104	0.082
盆や正月などの節目には、必ず親戚と会う	0.399	0.232
親戚に相談できる人がいる	0.167	0.082

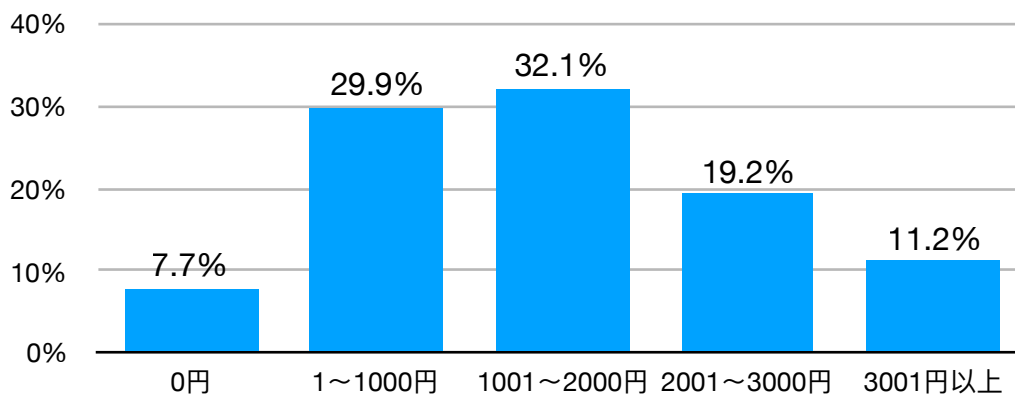
上記の各項目を男女別、世帯別でみる際、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。いずれの項目も性別、世帯収入別による差は統計的に有意ではありませんでした。

4. 子どもが毎月自由に使えるお金

子どもは毎月平均2118円を自由に使えることができると回答しています。

その分布は0円7.7%、1～1000円29.9%、1001～2000円32.1%、2001～3000円19.2%、3001円～11.2%となっています。

図4 子どもが毎月自由に使えるお金



「世帯年間収入」（11段階）別にこの「毎月自由に使えるお金」の金額に差がみられるかどうかを検定で確かめてみると有意差が認められませんでした（ $p=0.655$ ）（注1）。

男女別の「子どもが毎月自由に使えるお金」の平均額は男子1869円、女子2287円でした。「毎月に自由使えるお金（金額）」と性別に対して検定をおこなった結果は、有意確率（ p 値）が0.001となり、統計的に有意な差がありました（注2）。

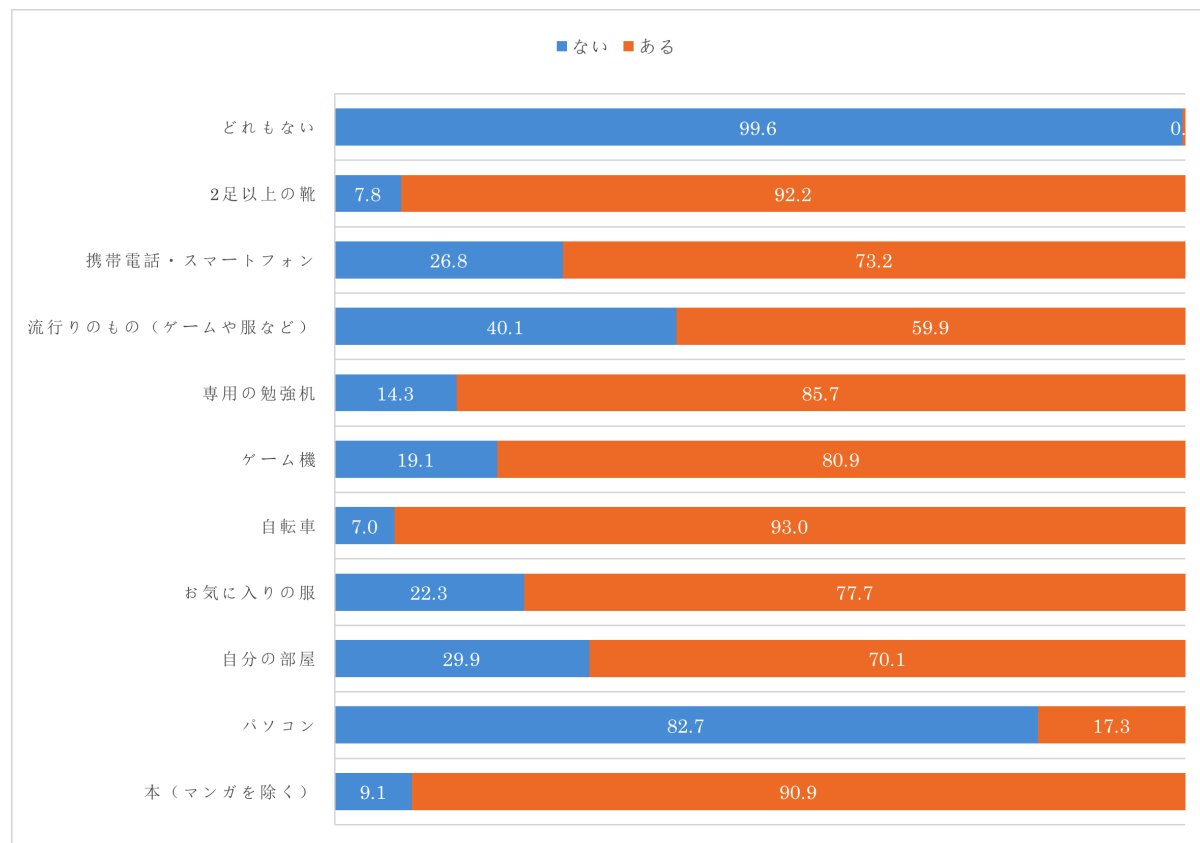
（注1）分布を整理した5段階の「毎月自由に使えるお金（順序尺度）」と11段階の「年間世帯収入」に対して検定を行った結果も、有意確率（ p 値）が0.382となり、有意差がない結果となりました。

（注2）分布を整理した5段階の「毎月自由に使えるお金（順序尺度）」と性別に対して χ^2 （カイ）二乗検定をおこなった結果は、有意確率が0.005となり、統計的に有意な差がありました。

5. 子どもの持ち物（複数回答）

子どもの持ち物の割合を図5に示しました。子どもは多くの項目について、持ち物が「ある」と回答しています。ただ、82.7%の子どもがパソコンは持っていないと答えています。

図5 子どもの持ち物（%）



上記の各項目を男女別、世帯別でみる際、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
本（マンガを除く）	0.003	0.428
パソコン	0.105	0.866
自分の部屋	0.574	0.001
お気に入りの服	0.000	0.358
自転車	0.115	0.219
ゲーム機	0.000	0.112
専用の勉強机	0.076	0.003
流行りのもの（ゲームや服など）	0.063	0.366
携帯電話・スマートフォン	0.001	0.988
2足以上の靴	0.000	0.867
どれもなし	0.128	0.609

なかでも注目すべきは、「自分の部屋」「専用の勉強机」以外の子どもの持ち物に関する項目について世帯収入による回答の差がなかったということです。例えば、82.7%の子どもがパソコンを持っ

ていません。これは世帯収入と関係せず、多くの子どもはパソコンを持っていないことを指します。一方、73.2%の子どもは携帯電話・スマートフォンをもっていると答えています。

つまり、世帯収入と関係なく、多くの子どもは携帯電話・スマートフォンを持っているということになります。このことは重要な発見といえるでしょう。部屋や勉強机と違って持ち運びできる身の回りの服やゲーム、携帯電話・スマートフォンなどを持つことには家庭の経済状況は影響していないということで、そうした持ち物は家の収入とは無関係に普及している（親が持たせている）と考えられます。なお、携帯電話・スマートフォンの所有状況は、2012年に実施された大阪子ども調査の結果（注：阿部ほか2014）の71%から73.2%に増加しています。

（注）阿部彩・埋橋孝文・矢野裕俊「『大阪子ども調査』結果の概要」2014年2月

図5-1 本（マンガを除く）（ $p=0.003$ ）

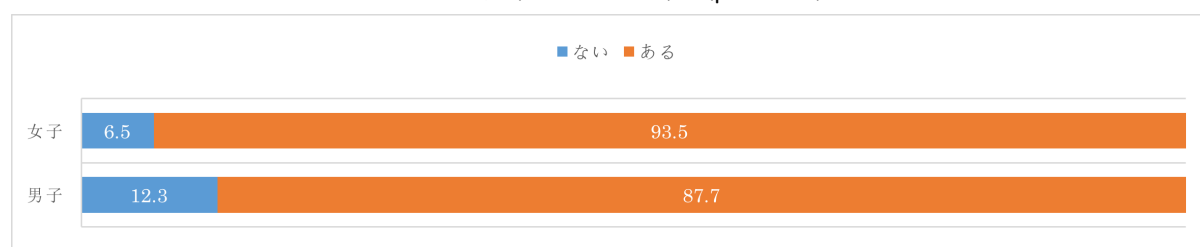


図5-2 お気に入りの服（ $p=0.000$ ）



図5-3 ゲーム機（ $p=0.000$ ）

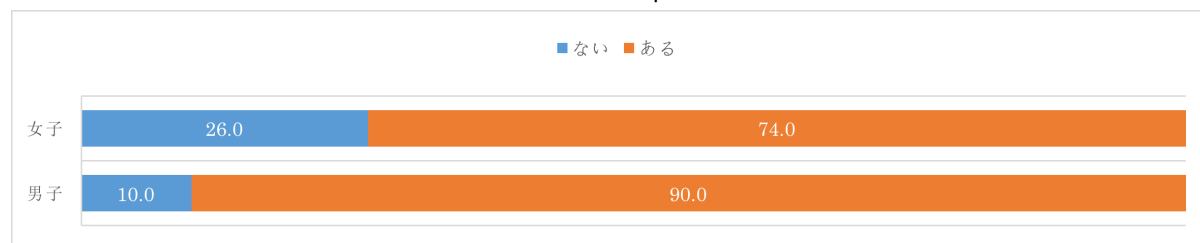


図5-4 携帯電話・スマートフォン（ $p=0.001$ ）

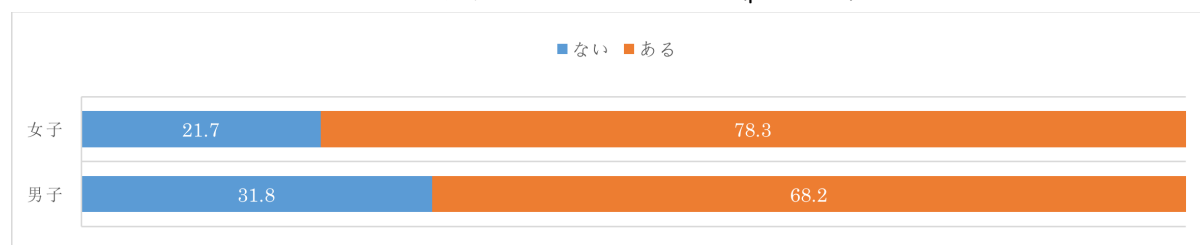
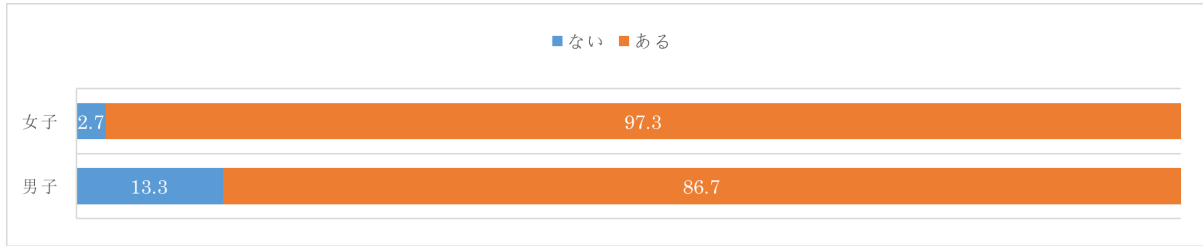


図5-5 二足以上の靴 (p=0.000)



自分の部屋と専用の勉強机が「ない」とした子どもの割合は、家庭の経済状況と関係しています。家庭の年間世帯収入が300万円以下の子どもは、そうでない子どもに比べ、自分の部屋がない、専用の勉強机がないと答える割合が多くなっています。こちらの発見も同じく重要です。と言いますのも、そうした勉強環境の違いは子どもの学業に影響することが予測されるからです（この点についてはII-1 学校生活も参照のこと）。

図5-6 自分の部屋 (p=0.001)

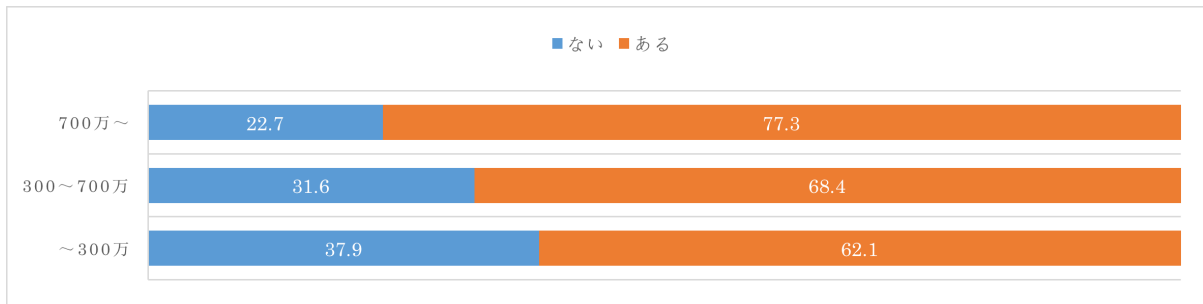
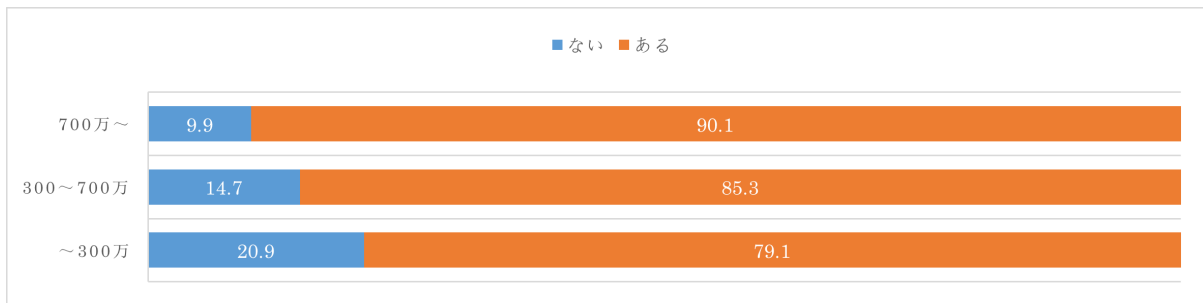


図5-7 専用の勉強机 (p=0.003)



II. 学校生活と習い事

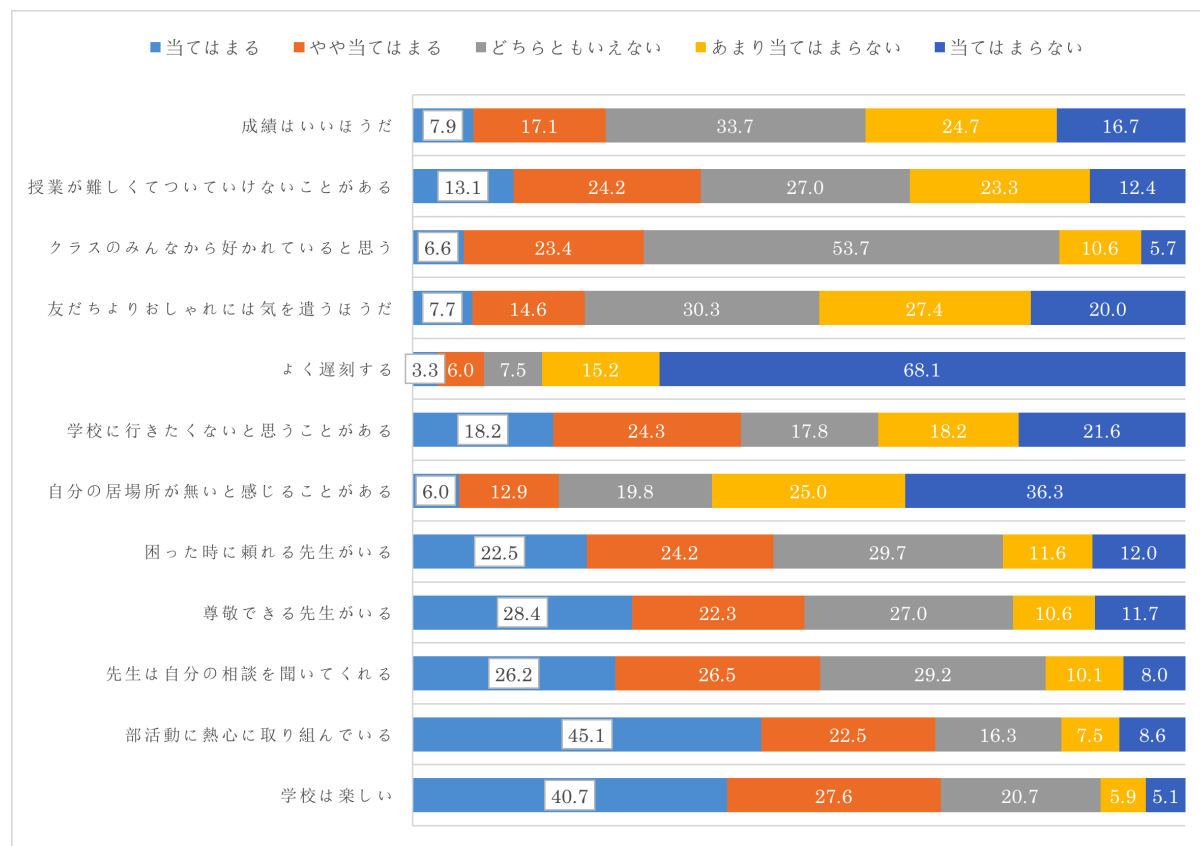
1. 学校生活

学校生活について尋ねました。12項目の中、「当てはまる」としている割合が最も高いのは「部活動に熱心に取り組んでいる」（45.1%）、「学校は楽しい」（40.7%）でした。

「当てはまらない」としている割合が最も高いのは「よく遅刻する」（68.1%）でした。また、「自分の居場所が無いと感じることがある」については、「あまり当てはまらない」（25.0%）、「当てはまらない」（36.3%）で全体の61.3%を占めています。しかし、2割弱の生徒が居場所がないと感じることがあることは無視できない事実であり、また、4割強の生徒が「学校に行きたくないことがある」（そのどちらかが女子の場合には割合が高い）と答えていることは深刻に受け止める必要があります。

後でふれるように、成績や「授業が難しい」で世帯収入による違いがみられることが注目されます。ただし、全体の3分の2が「学校は楽しい」と答えており、そのことには世帯収入差による差がないこと、「先生の評価（相談を聞いてくれる、尊敬できる、頼れる）」についても世帯収入による差がないことも注目されます。

図5 学校生活についての考え方（%）

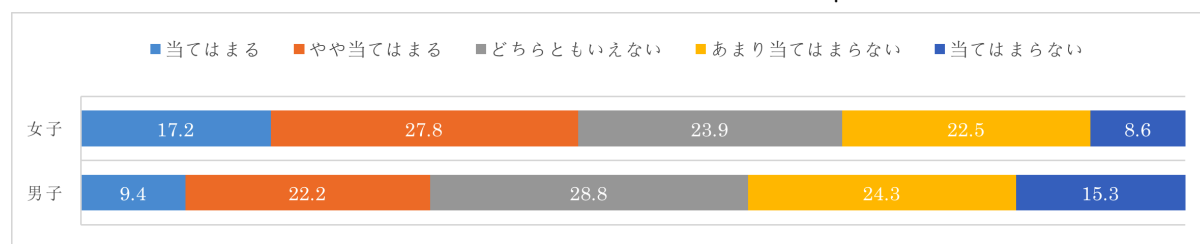


上記の各項目を男女別、世帯収入別でみる際、それぞれの項目の有意確率は下表のようになっています。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
成績はいいほうだ	0.052	0.000
授業が難しくついていけないことがある	0.000	0.016
クラスのみんなから好かれていると思う	0.022	0.001
友だちよりおしゃれには気を遣うほうだ	0.000	0.586
よく遅刻する	0.313	0.967
学校に行きたくないと思うことがある	0.001	0.228
自分の居場所が無いと感じることがある	0.000	0.198
困った時に頼れる先生がいる	0.160	0.604
尊敬できる先生がいる	0.114	0.719
先生は自分の相談を聞いてくれる	0.099	0.738
部活動に熱心に取り組んでいる	0.041	0.331
学校は楽しい	0.050	0.088

女子の方が男子よりも「授業が難しくついていけないことがある」の項目で高い割合を占めています。

図5-1 授業が難しくついていけないことがある (p=0.000)



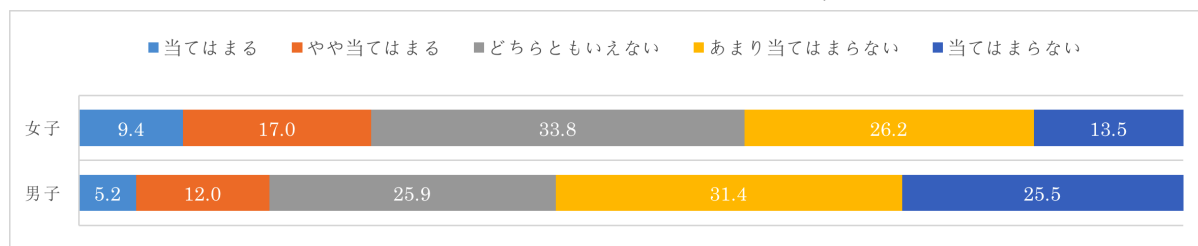
男子の方が女子よりも「クラスのみんなから好かれていると思う」の項目について高い割合を占めます。

図5-2 クラスのみんなから好かれていると思う (p=0.022)



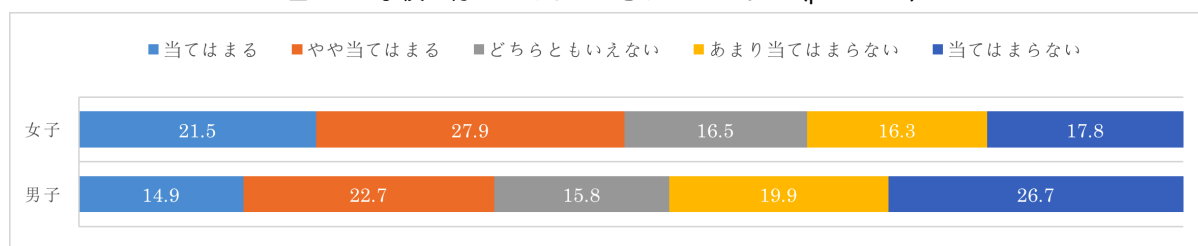
女子の方が男子よりも「友だちよりおしゃれには気を遣うほうだ」の項目について高い割合を占めます。

図5-3 友だちよりおしゃれには気を遣うほうだ (p=0.000)



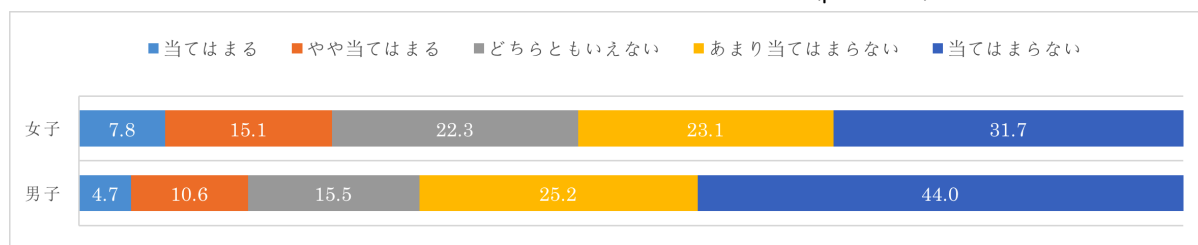
女子の方が男子よりも「学校に行きたくないと思うことがある」の項目について高い割合を占めます。

図5-4 学校に行きたくないと思うことがある (p=0.001)



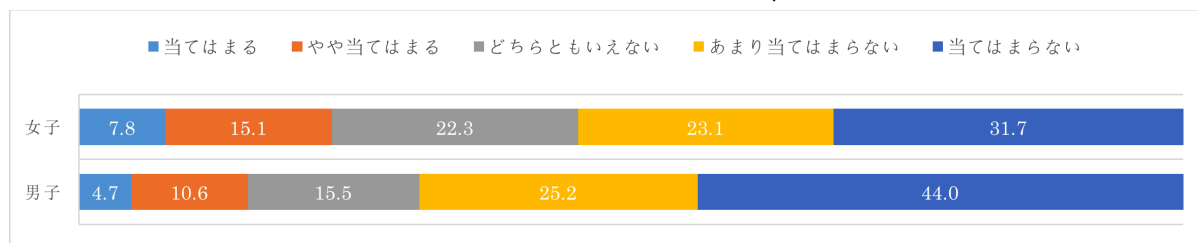
女子の方が男子よりも「自分の居場所が無いと感じることがある」の項目について高い割合を占めます。

図5-5 自分の居場所が無いと感じることがある (p=0.000)



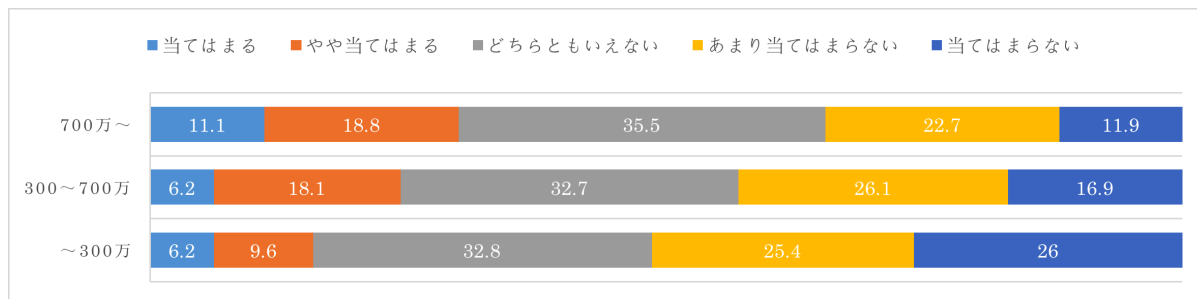
女子の方が男子よりも「部活動に熱心に取り組んでいる」の項目について高い割合を占めます。

図5-6 部活動に熱心に取り組んでいる (p=0.041)



「成績はいいほうだ」と「クラスのみんなから好かれていると思う」の項目では世帯収入別による差がみられました。「当てはまらない」と答えた世帯収入「～300万」の割合をみると、「成績はいいほうだ」（26%）、「クラスのみんなから好かれていると思う」（10.3%）で他の世帯収入と比べて高い割合を占めます。

図5-7 成績はいいほうだ (p=0.000)



「授業が難しくついていけないことがある」の項目では、「当てはまる」（15.3%）と答えた世帯収入「～300万」の割合は他の世帯収入と比べて高い割合を占めます。

図5-8 授業が難しくついていけないことがある (p=0.016)

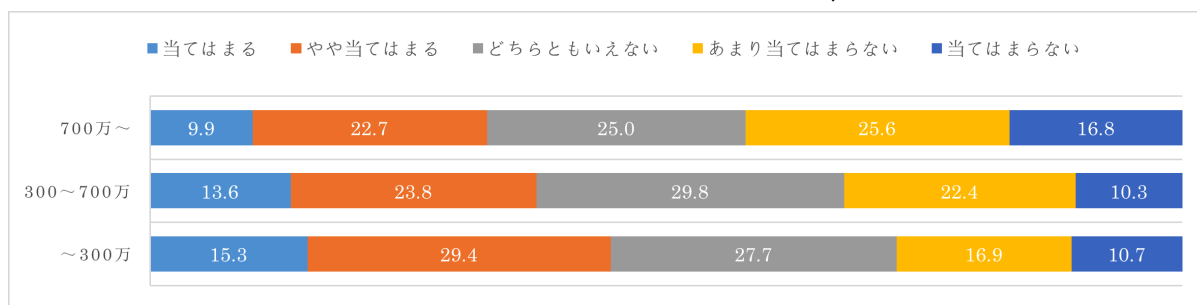
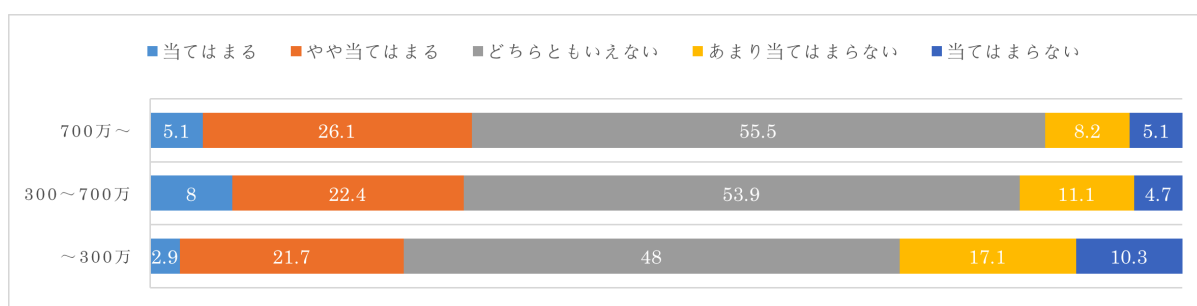


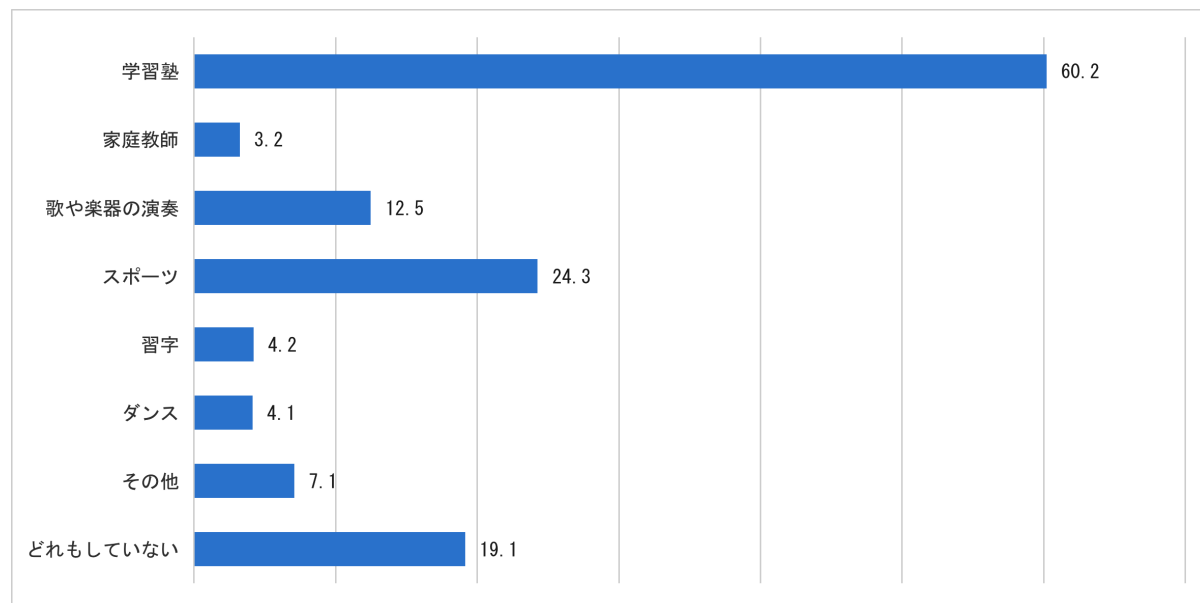
図5-9 クラスのみんなから好かれていると思う (p=0.001)



2. 習い事（複数回答）

習い事について尋ねました。習い事の中、最も割合が高いのは「学習塾」（60.2%）、次いで「スポーツ」（24.3%）でした。「どれもしていない」と答えた割合は19.1%でした。

図6 習い事の状況



上記の各項目を男女別、世帯収入別でみる際、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
学習塾	0.561	0.000
家庭教師	0.680	0.284
歌や楽器の演奏	0.000	0.086
スポーツ	0.000	0.115
習字	0.003	0.834
ダンス	0.000	0.991
その他	0.001	0.091
どれもしていない	0.985	0.002

男女別に比べると、男子と女子両方とも学習塾が高い割合を占めます。女子の方は「どれもしていない」（19.4%）を除いて、「学習塾」（59.0%）、「歌や楽器の演奏」（19.2%）、「スポーツ」（15.0%）の順になっています。また、男子の方は「どれもしていない」（19.3%）を除いて、「学習塾」（60.9%）、「スポーツ」（34.1%）の順になっています。

「習い事の状況」の項目では世帯収入別による差がみられました。「どれもしていない」と答えた世帯収入「～300万」（27.2%）の子どもの割合は他の世帯収入の子どもと比べて高い割合を占めます。なお、世帯収入と成績の関連については前のII-1 学校生活を参照ください。

図6-1 男女別・習い事の状況

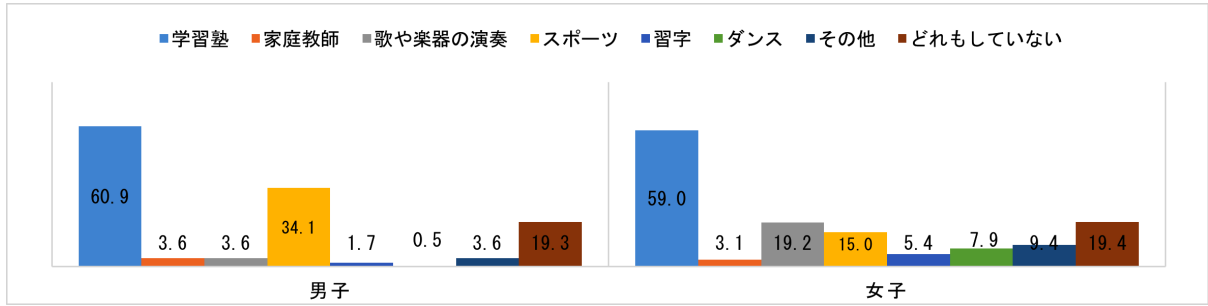
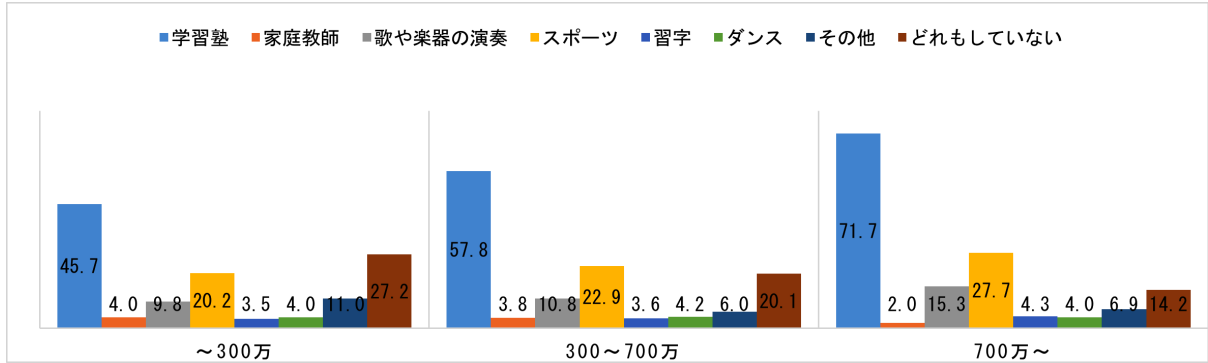


図6-2 世帯収入別・習い事の状況

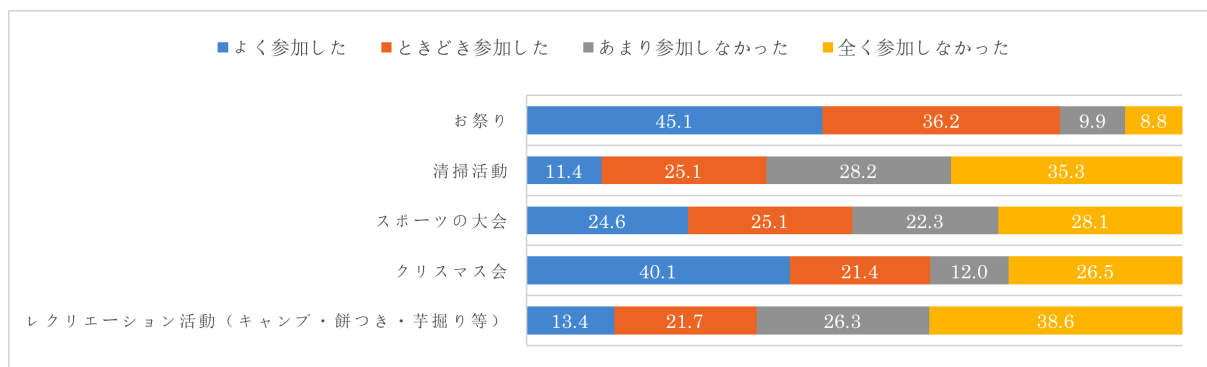


III. 地域でのこと

1. 地域行事への参加

「あなたは自治会などが地域で行う以下の行事にどのくらい参加したことがありますか」という問いについて、「よく参加した」と「ときどき参加した」を合わせた割合は「レクリエーション活動」35.1%と「清掃活動」36.5%になっていることに対して、「地蔵盆」61.5%と「スポーツ大会」49.7%になっています。「お祭り」への参加は特に高く、「よく参加した」45.1%、「ときどき参加した」36.2%、合わせて80%を超えています。

図7 地域で行う行事への参加状況 (%)



上記の各項目を男女別、世帯収入別でみる際、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。すべての項目では世帯収入による差は統計的に有意ではありませんでした。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
お祭り	0.001	0.696
清掃活動	0.133	0.230
スポーツの大会	0.140	0.550
クリスマス会	0.001	0.856
レクリエーション活動 (キャンプ・餅つき・芋掘り等)	0.097	0.426

男子と女子を比べると、女子は男子に比べ「お祭り」「クリスマス会」に参加した割合が高くなります。その他の項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

図7-1 お祭り (p=0.001)

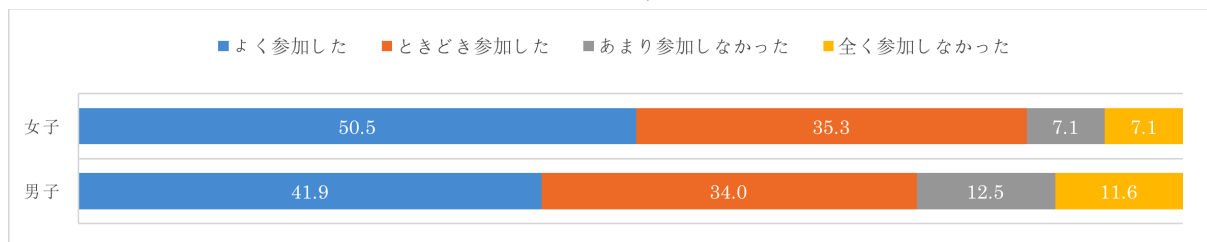
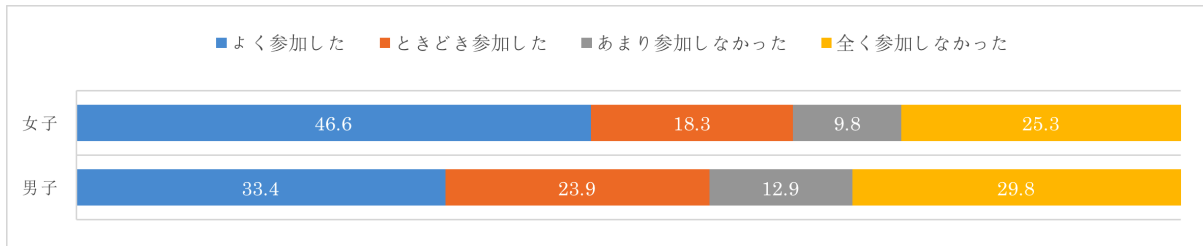


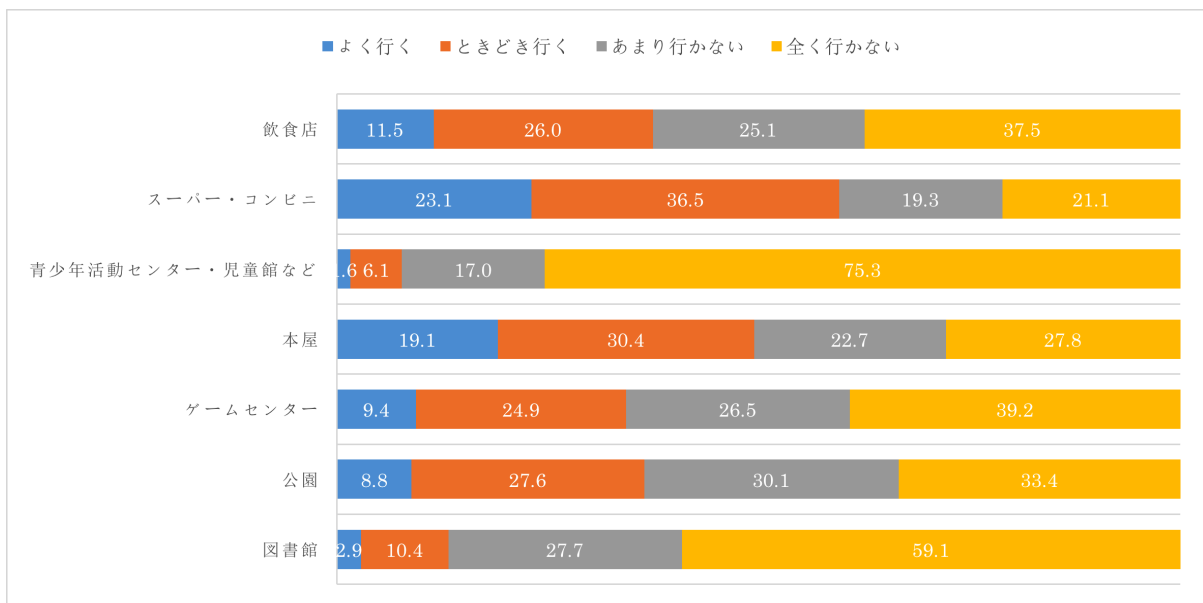
図7-2 クリスマス会 (p=0.001)



2. 暇なときに行く場所

「あなたは暇なとき、以下の場所に行きますか」という問いについて、よくいく場所は「スーパー・コンビニ」が23.1%と一番高く、次に「本屋」19.1%になっています。一方、全く行かない場所の割合が一番高かったのは「青少年活動センター・児童館など」(75.3%)、「図書館」(59.1%)でした。

図8 よく行く場所の状況



上記の各項目を男女別、世帯収入別でみる際、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
図書館	0.005	0.765
公園	0.022	0.799
ゲームセンター	0.025	0.318
本屋	0.000	0.749
青少年活動センター・児童館など	0.986	0.711
スーパー、コンビニ	0.907	0.189
飲食店	0.005	0.019

男子と女子を比べると、男子は女子に比べ「公園」「ゲームセンター」に「よく行く」割合が高くなっています。これに対して、女子は男子に比べ「図書館」「本屋」「飲食店」に行く割合が高くなっています。特に、「飲食店」に女子が「よく行く」割合（14.2%）は、男子の「よく行く」割合（7.7%）の2倍になっています。「青少年活動センター・児童館など」「スーパー、コンビニ」の二つの項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

図8-1 図書館 (p=0.005)

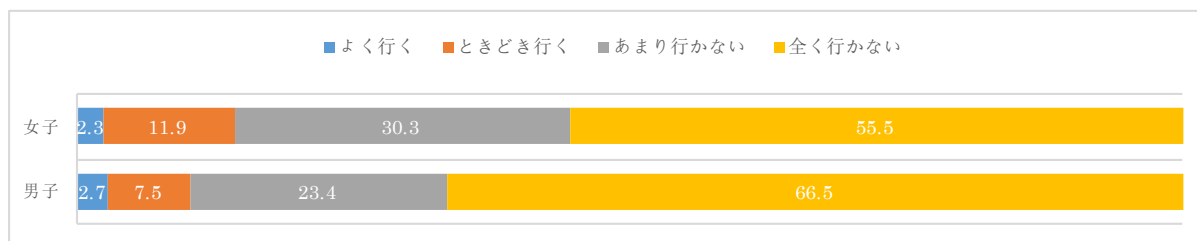


図8-2 公園 (p=0.022)

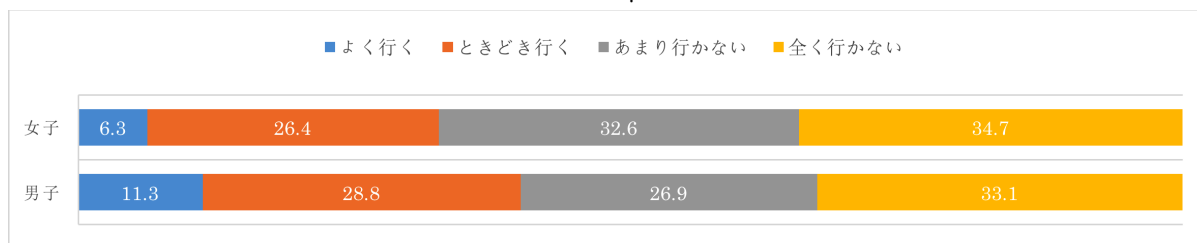


図8-3 ゲームセンター (p=0.025)



図8-4 本屋 (p=0.000)

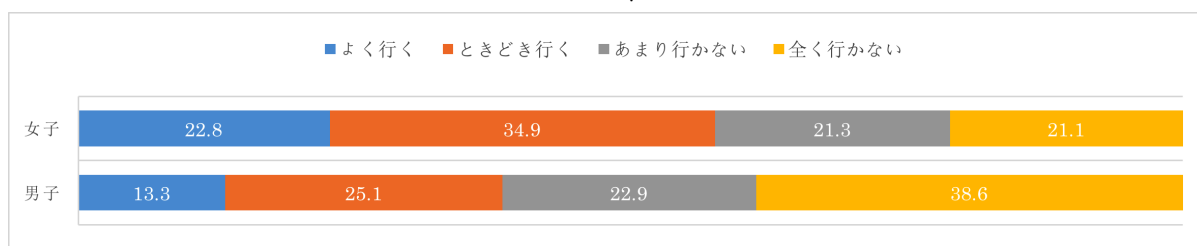
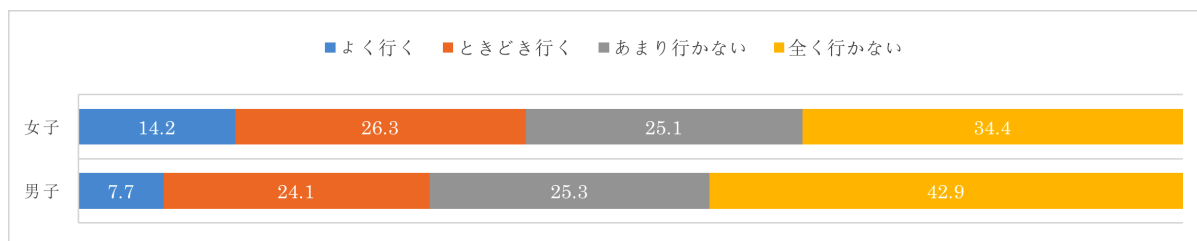
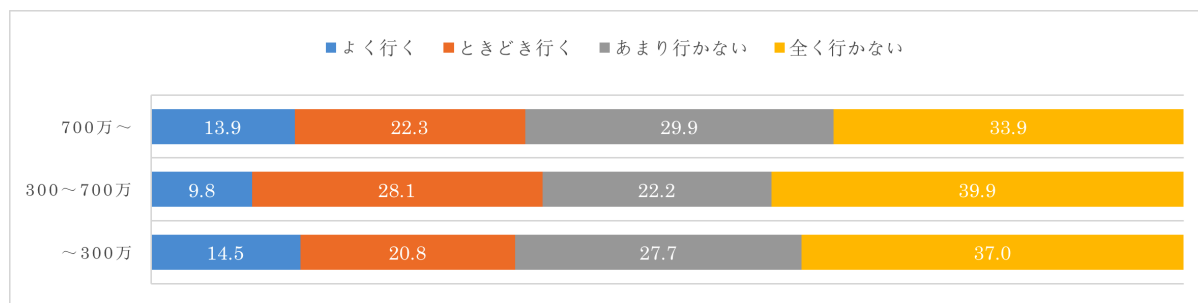


図8-5 飲食店 (p=0.005)



世帯収入別で見ますと、「飲食店」の項目では収入による差は統計的に有意です。「～300万」の世帯は「あまり行かない」と「全く行かない」を合わせた割合64.7%となっています。その割合は「300～700万」と「700万～」の世帯より高くなっています。その他の項目では世帯収入別による差は統計的に有意ではありませんでした。

図8-5 飲食店 (p=0.019)

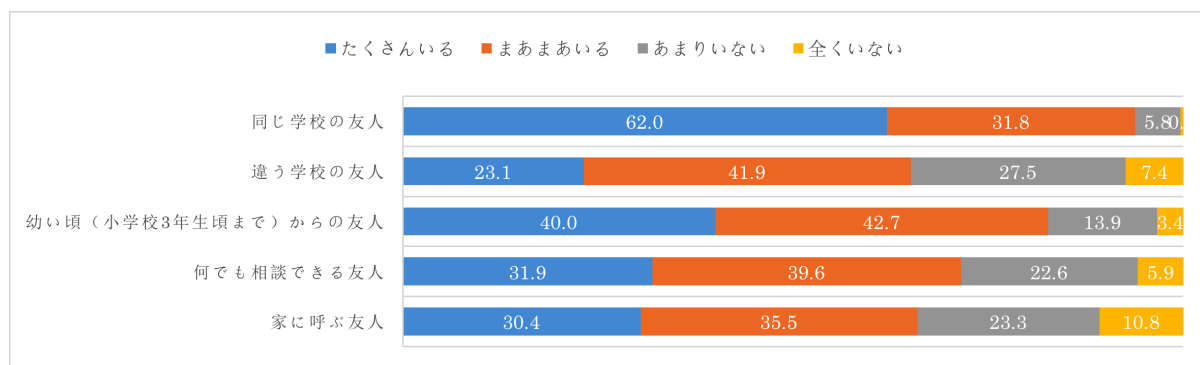


IV. 友人のこと

1. 友人

「あなたには現在、以下に挙げるような友人がどのくらいいますか」という問いについて、「同じ学校の友人」が「たくさんいる」割合が一番高く62.0%になっています。次に割合が高いのは「幼い頃（小学校3年生頃まで）からの友人」40.0%になっています。

図9 友人の状況



上記の各項目を男女別、世帯収入別でみる際、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
同じ学校の友人	0.002	0.005
違う学校の友人	0.001	0.237
幼い頃（小学校低学年以前）からの友人	0.707	0.015
何でも相談できる友人	0.015	0.624
家に呼ぶ友人	0.034	0.054

男子と女子を比べると、男子は女子に比べ「同じ学校の友人」「違う学校の友人」たくさんいる割合が高くなっています。これに対して、女子は男子に比べ「何でも相談できる友人」「家に呼ぶ友人」たくさんいる割合が高くなります。「幼い頃（小学校低学年以前）からの友人」の項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

図9-1 同じ学校の友人 (p=0.002)



図9-2 違う学校の友人 (p=0.001)



図9-3 何でも相談できる友人 (p=0.015)

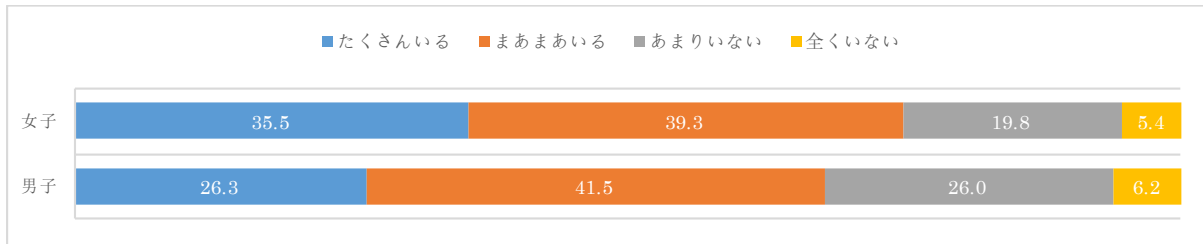
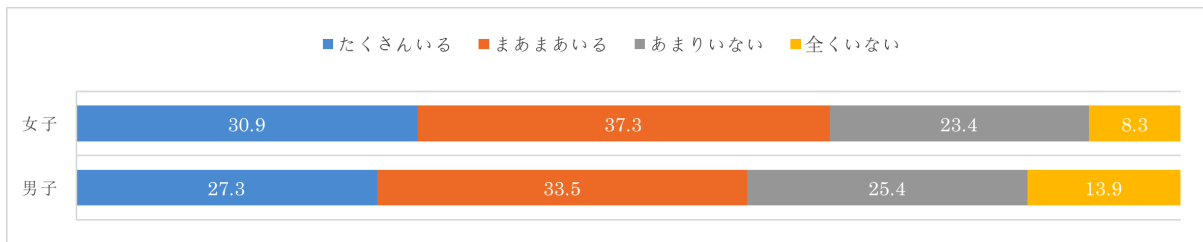


図9-4 家に呼ぶ友人 (p=0.034)



世帯の収入別でみたところ、「同じ学校の友人」「幼い頃からの友人」の項目について、収入によって統計的に有意な差が生まれました。世帯収入が高くなるほど、「同じ学校の友人」「幼い頃からの友人」が多くなっています。その他の項目では世帯収入別による差は統計的に有意ではありませんでした。

図9-5 同じ学校の友人 (p=0.005)

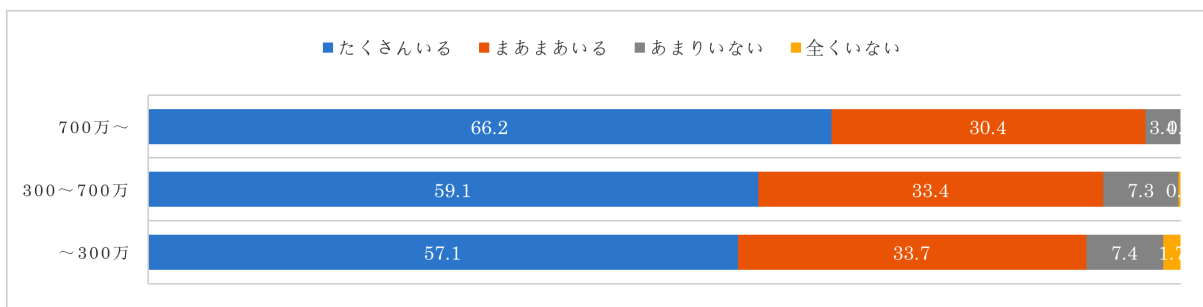
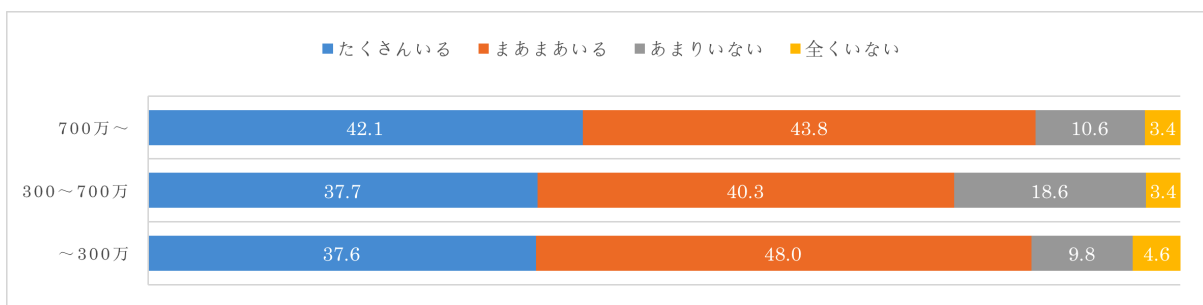


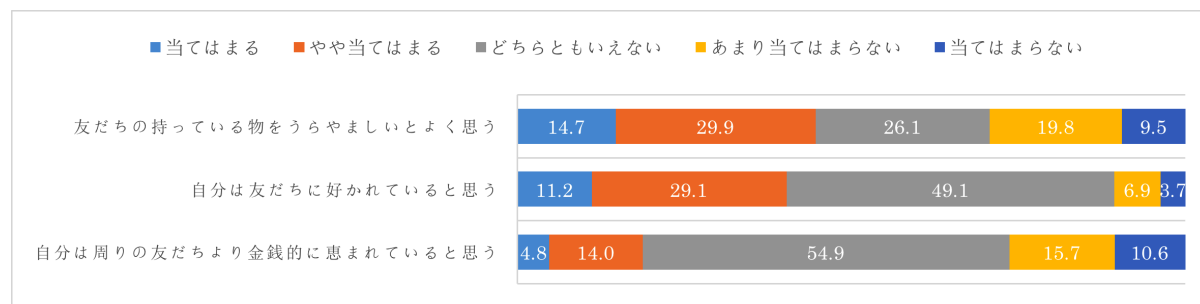
図9-6 幼い頃からの友人 (p=0.015)



2. 友人との関係

「あなたは友だちとの関係について、次のようなことはどのくらい当てはまりますか」という問いについて、世帯収入とクロスしてみたところ、世帯収入が高くなるほど、「自分は友だちに好かれていると思う」「自分は周りの友だちより金銭的に恵まれていると思う」の2項目について「当てはまる」割合は高くなっています。

図10 友人との関係



上記の各項目を男女別、世帯収入別でみた場合の、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。すべての項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
友だちの持っているものをうらやましいと思う	0.362	0.515
自分は友だちに好かれていると思う	0.078	0.021
自分は周りの友だちより金銭的に恵まれていると思う	0.656	0.000

「友だちの持っているものをうらやましいと思う」の項目では世帯収入別による差は統計的に有意ではありませんでしたが、「自分は友だちに好かれていると思う」「自分は周りの友だちより金銭的に恵まれていると思う」では統計的に有意な差が出ています。世帯収入が少ない家庭の生徒ほど、二つの項目の「当てはまる」「やや当てはまる」の割合が低くなっています。

図10-1 自分は友人に好かれていると思う (p=0.021)

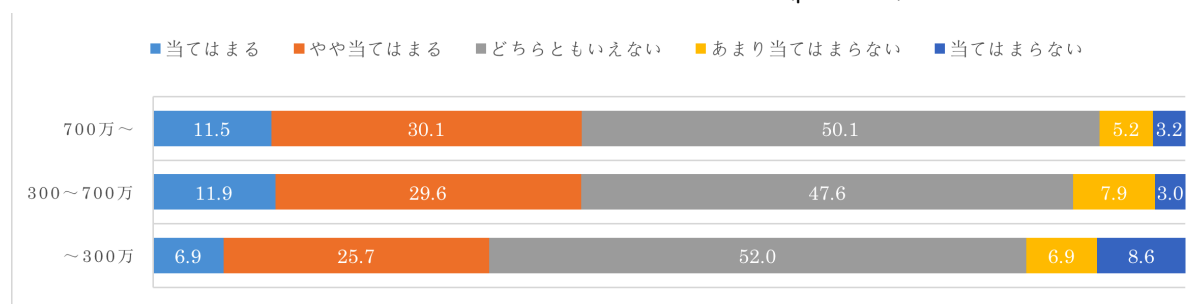
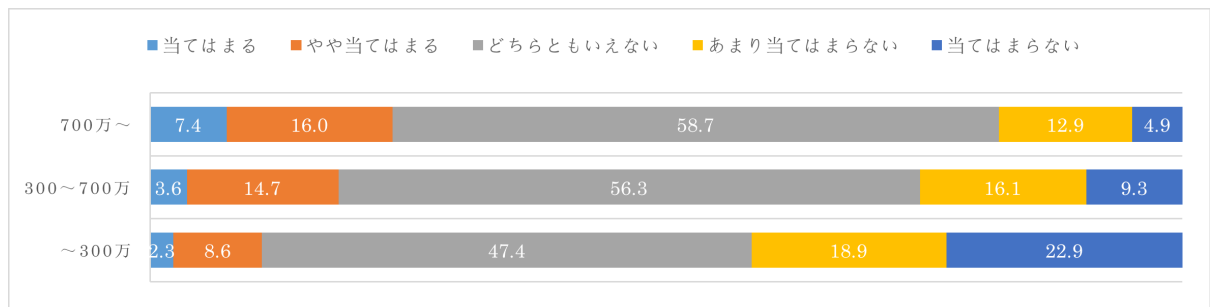


図10-2 自分は周りの友人より金銭的に恵まれていると思う (p=0.000)

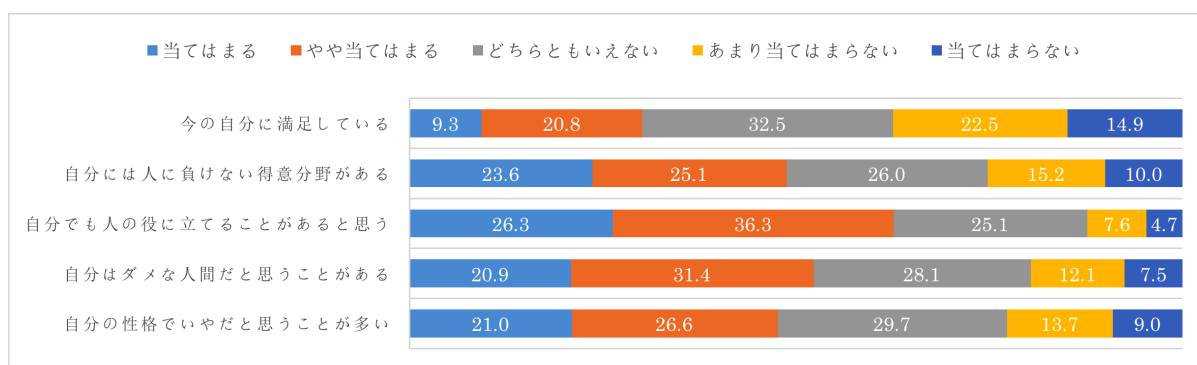


V. 自己肯定感と人生観

1. 自己肯定感

「あなたは自分についてどう思いますか？」という問いについて、「自分でも人の役に立てることがあると思う」「自分には人に負けない得意分野がある」という2つの項目において、肯定的な選択肢（「当てはまる」と「やや当てはまる」）を選んだ子どもはそれぞれ全体の6割以上（62.6%）と5割程度（48.7%）に達しています。それにもかかわらず、「今の自分に満足している」において肯定的な答えを選択した子どもは全体の3割程度（30.1%）しか占めていません。その一方で、「自分はダメな人間だと思うことがある」あるいは「自分の性格でいやだと思うことが多い」において「当てはまる」と「やや当てはまる」とした子どもも全体の半数程度（52.3%、47.6%）です。

図11 自分についてどう思うかの回答 (%)

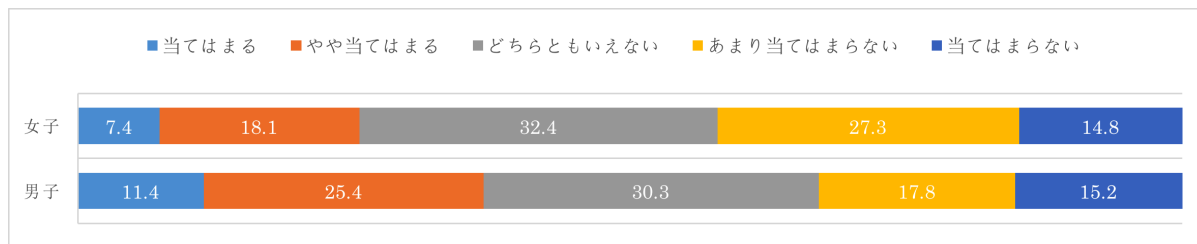


項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
今の自分に満足している	0.001	1.000
自分には人に負けない得意分野がある	0.005	0.220
自分でも人の役に立てることがあると思う	0.067	0.365
自分はダメな人間だと思うことがある	0.066	0.214
自分の性格でいやだと思うことが多い	0.000	0.320

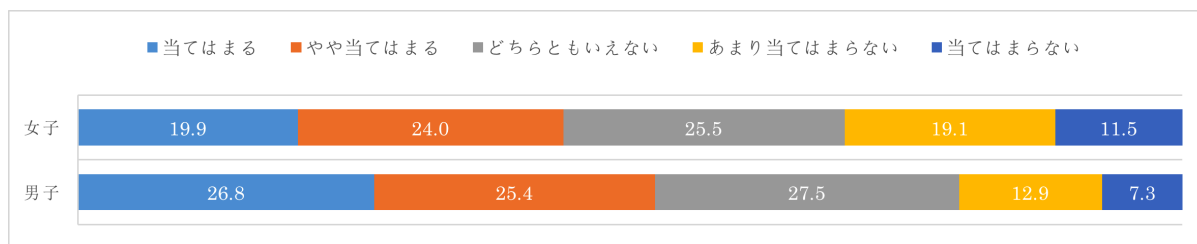
自己肯定感に対する答えは性別によって異なることが以下の集計からわかります。例えば、「今の自分に満足している」という項目においては、肯定的に答えた（「当てはまる」と「やや当てはまる」）男子は36.8%、女子は25.5%です。両者の間の差（11.3%ポイント）は統計的に有意になっています（ $p=0.001$ ）。そして、いずれの性別でも、「どちらとも言えない」を答えたものは全体の3割以上（30.3%、32.4%）を占めています。つまり約3分の1の子どもが自己に満足するかしなにかについてははっきり示していません。この割合は、子どもの主観意識に関する問い（13～15）の諸項目の中で比較的高くなっています。

「自分には人に負けない得意分野がある」という項目でも性別による差が統計的に有意です（ $p=0.005$ ）。さらに、「自分の性格でいやだと思うことが多い」という項目においては肯定的に答えた（「当てはまる」と「やや当てはまる」）女子の割合（57.2%）が男子（28.7%）より多くなっています（ $p=0.000$ ）。その他の項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

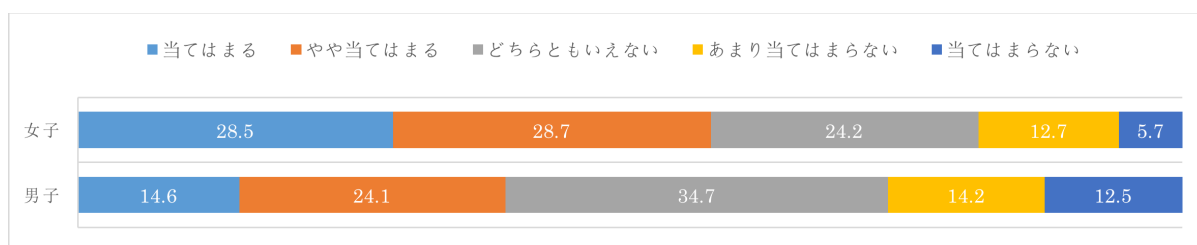
問11-1 今の自分に満足している (p=0.001)



問11-2 自分には人に負けない得意分野がある (p=0.005)



問11-3 自分の性格でいやだと思ふことが多い (p=0.000)



自己肯定感に関する全ての項目では世帯収入による差は統計的に有意ではありませんでした。このことは注目に値する結果であるといえます(注1)。その理由は、これまでにみてきたように、家族との旅行経験や家にある本の数(Ⅰ-2)、専用の部屋や机(Ⅰ-5)、成績や授業の難度(Ⅱ-1)、習い事(Ⅱ-2)、友人との関係(Ⅳ-2)など多くの項目に家庭の世帯収入差が影響を及ぼしており、それらが生徒の自己肯定感にも何らかの影響を及ぼしているのではないかと予測されていたからです。なぜ今回の「京都子ども調査」ではこういう結果になっているのか、京都市の教育の特徴(注2)や先行するほかの全国調査や、地方自治体ごとの調査の結果との異同を踏まえながら検討し、今後、自己肯定感を決める要因を深く究明していく必要があります。

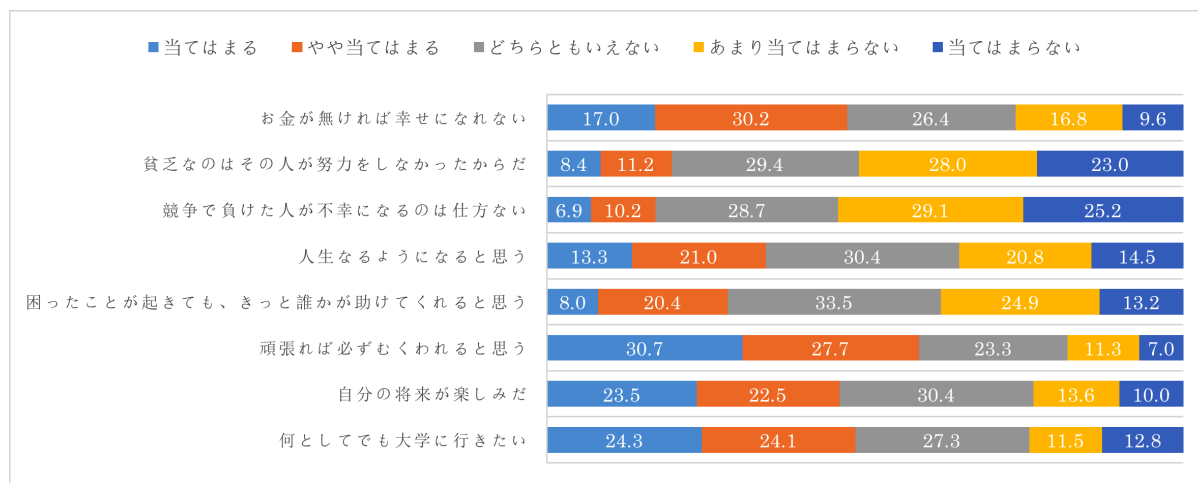
(注1)「大阪子ども調査」(2014年2月)では、「子どもの自己肯定感」は家庭の経済状況と密接に関係しています」と述べられています。ただし「大阪子ども調査」では「貧困層」(14%)と「非貧困層」(86%)の2つに分けて対比しています。一方、ここでは、「調査の概要」でふれたように、「年間収入が300万未満、300万以上~700万未満、700万以上という3つの収入区分ごとに」有意差があるかどうかをみています。そこで今回の「京都子ども調査」でも年間世帯収入が300万円未満の層(16.9%)と300万円以上の層(83.1%)の2つに分けて有意差があるかどうかをみましたが、結果は3つに分けてみた時と変わらず、有意差がないということになりました。

(注2)京都市では「学校教育・目指す子ども像」として「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」という教育理念を掲げ「確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和のとれた育成」を基本指針としています(京都市教育委員会『京都市の教育改革』2017年、『平成29年度学校教育の重点』2017年)を参照。

2. 子どもの人生観

子どもが貧困、金銭、競争、将来などに対してどのような意識をもっているかを尋ねました。

図12 貧困に対する子どもの観点についての回答 (%)



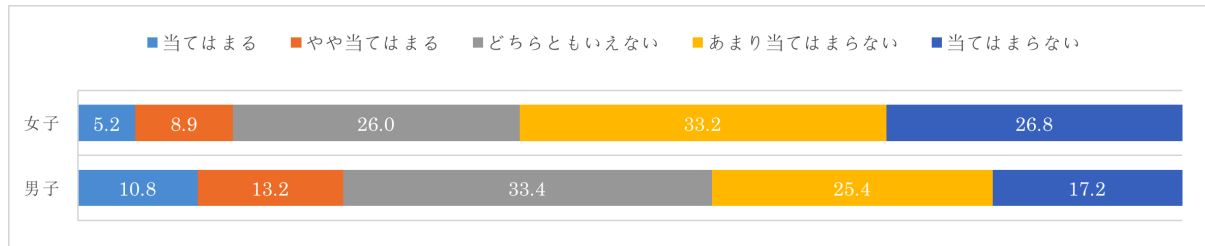
そのうち、「お金が無ければ幸せになれない」と答えた（「当てはまる」と「やや当てはまる」）子どもは、全体の半数程度（47.2%）を占めており、6割弱（58.4%）の子どもが「頑張れば必ずむくわれると思う」と答えています。

「人生なるようになる」と思っている子ども（34.3%）とそうだと思っていない子ども（35.3%）がほぼ同じ割合を占めていますが、「貧乏なのはその人が努力をしなかったからだ」「競争で負けた人が不幸になるのは仕方ない」という二つの項目においては、不賛成（「当てはまらない」と「あまり当てはまらない」）の割合は賛成（「当てはまる」と「やや当てはまる」）より圧倒的に多くなっています（前者は51.0%対19.6%、後者は54.3%対17.1%）。

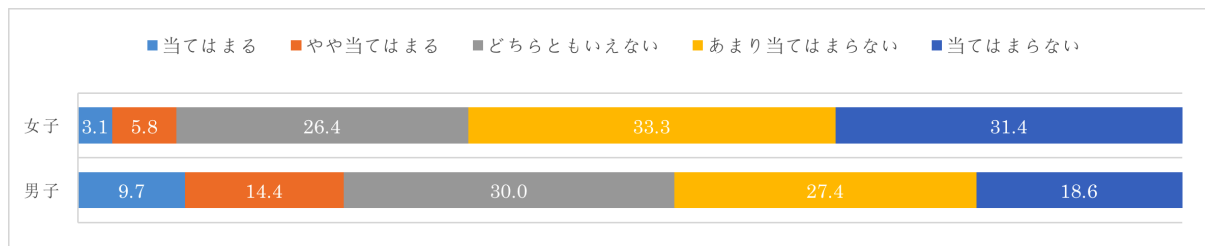
項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
お金が無ければ幸せになれない	0.060	0.702
貧乏なのはその人が努力をしなかったからだ	0.000	0.391
競争で負けた人が不幸になるのは仕方ない	0.000	0.869
人生なるようになると思う	0.007	0.886
困ったことが起きて、きっと誰かが助けてくれると思う	0.247	0.692
頑張れば必ずむくわれると思う	0.143	0.525
自分の将来が楽しみだ	0.216	0.097
何としてでも大学に行きたい	0.114	0.000

性別に照らしてみると、以下の3項目では男女による統計的に有意な差がみられています。まず、「貧乏なのはその人が努力しなかったからだ」（ $p=0.000$ ）と「競争で負けた人が不幸になるのは仕方ない」（ $p=0.000$ ）では、否定的な答え（「あまり当てはまらない」と「当てはまらない」）を選んだ女子の割合は男子より明らかに高く、前者は60%対42.6%、後者は64.7%対46.0%となっています。

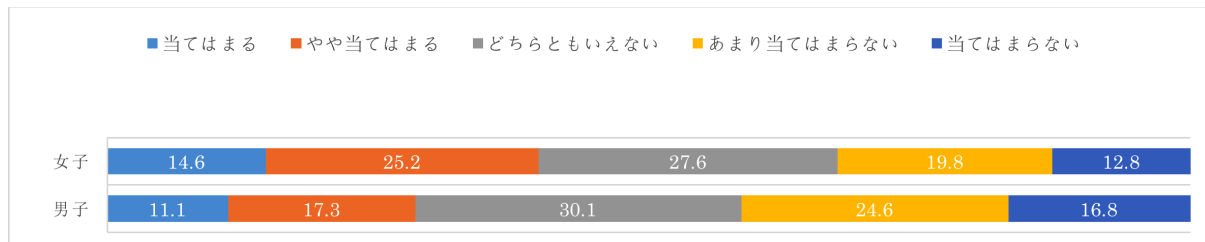
問12-1 貧乏なのはその人が努力しなかったからだ (p=0.000)



問12-2 競争で負けた人が不幸になるのは仕方がない (p=0.000)



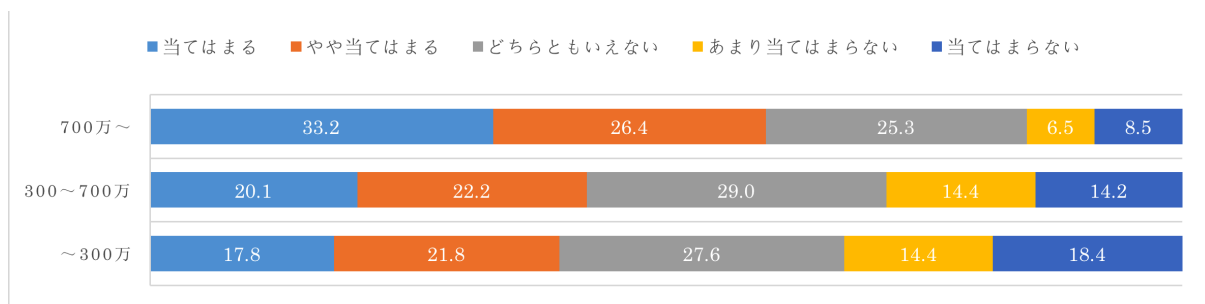
問12-3 人生なるようになると思う (p=0.007)



そして、「人生なるようになると思う」(p=0.007)においては、肯定的な答え(「当てはまる」と「やや当てはまる」)を選択した女子の割合は39.8%、男子は28.4%です。その他の3項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

家族の「年間世帯収入」にクロスしてみると、「何としてでも大学に行きたい」について、それぞれの収入層における大学に進学する意欲を抱えている(「当てはまる」と「やや当てはまる」を選んだ)子どもの割合からみると、年間世帯収入が「300万以下」の場合は39.6%、「300~700万」は42.3%、「700万以上」は59.6%となります。それぞれを比べて、三収入階層の間には2.7%ポイントと17.3%ポイントの差があります(p=0.000)。

問12-4 何としてでも大学に行きたい (p=0.000)



その他の7項目では世帯収入による差は統計的に有意ではありませんでした。この結果から、経済的生活や貧困に関係する「人生観」には世帯収入はほぼ関係しないことが明らかになったといえます。

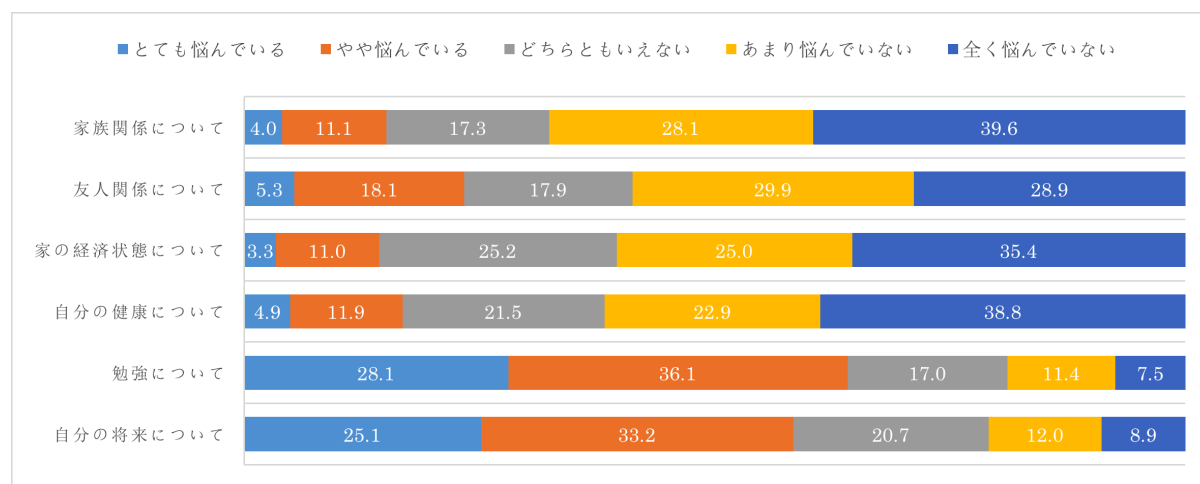
なお、子どもの「何としても大学へ行きたい」希望と同様に、保護者が子どもに望む「希望教育程度」も世帯収入と関係しています（保護者票Ⅱ-2 希望教育程度を参照のこと）

3. 子どもの悩み

「あなたは次のようなことについてどのくらい悩んでいますか？」という問いについては、「家族関係」「友人関係」「家の経済状態」「自分の健康」それぞれの項目において「とても悩んでいる」「やや悩んでいる」とした子どもは、全体の2割前後（14.3%～23.4%）を占めており、「あまり悩んでいない」「全く悩んでいない」と答えた子どもは6割（58.8%～67.7%）くらい占めています。もちろん、これらの項目について悩んでいる子どもの割合が少ないといっても、それぞれは子どもにとって大きな不安材料であることは確かですので、何らかの対応が必要と思われる。それに対して、「勉強」または「自分の将来」について悩んでいる子どもは、全体の半数以上（64.2%と58.3%）を占めており、「全く悩んでいない」子どもはわずか1割未満（7.5%と8.9%）です。

つまり、「自分の健康」以外には、ほとんどの子どもは「家族関係」「経済状況」「友人関係」などという自分を取り巻く環境的な事から比べて、「勉強」「自分の将来」のような自分自身のこと

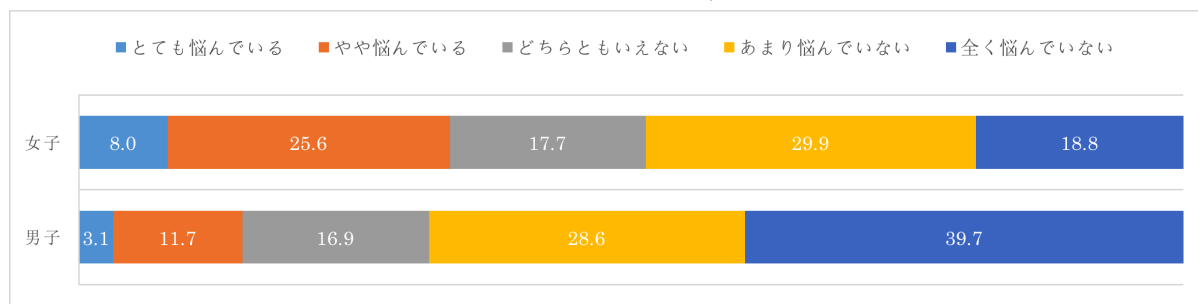
図13 子どもの悩みについての回答（%）



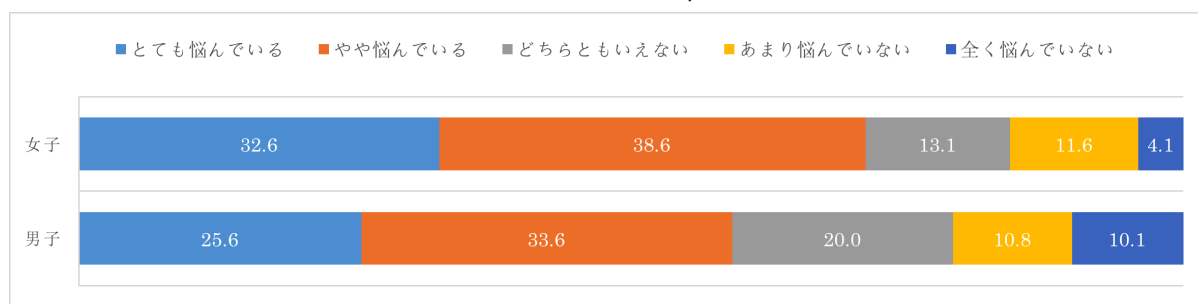
項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
家族関係について	0.097	0.007
友人関係について	0.000	0.447
家の経済状態について	0.094	0.000
自分の健康について	0.090	0.039
勉強について	0.000	0.062
自分の将来について	0.004	0.443

悩み事に関する6項目を性別に照らしてみると、以下の3項目では男女による統計的に有意な差がみられています。まず、「友人関係について」(p=0.000)においては、「とても悩んでいる」と「やや悩んでいる」を選択した女子の割合は33.6%、男子の割合(14.4%)の2倍以上となっています。また、自分自身のことに関わる「勉強について」(p=0.000)と「自分の将来」(p=0.004)という2項目では、「とても悩んでいる」と「やや悩んでいる」を選んだ女子の割合は男子より高く、前者は71.2%対59.2%、後者は64.5%対53.9%となっています。友人、勉強、自分の将来という3つのことについて女子は男子よりも悩んでいる人の割合が高いことが特徴的です。その他の3項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

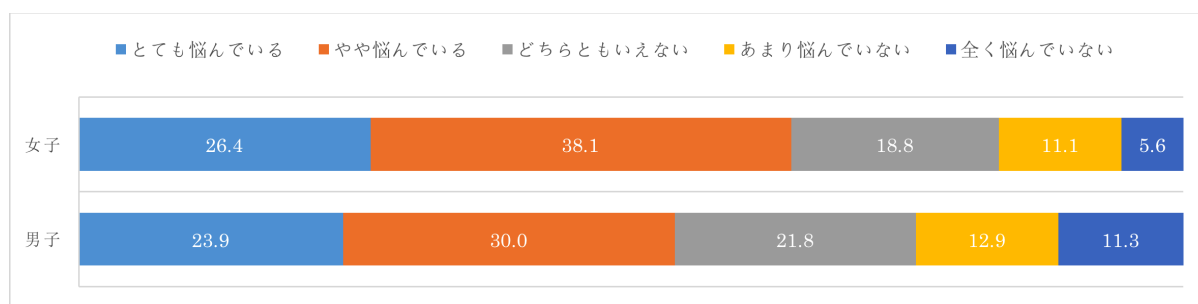
問13-1 友人関係について (p=0.000)



問13-2 勉強について (p=0.000)



問13-3 自分の将来について (p=0.004)

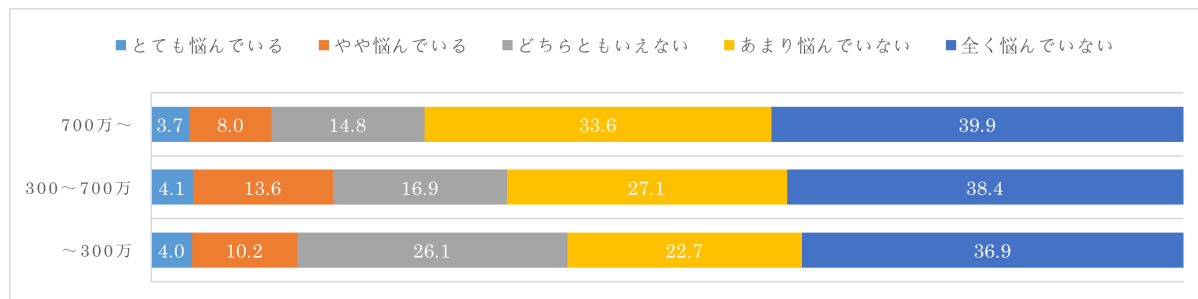


家族の「年間世帯収入」とクロスしてみると、統計的に有意な差がみられたのは、「家族関係について」(p=0.007)、「家の経済状況について」(p=0.000)と「自分の健康について」(p=0.039)3項目です。

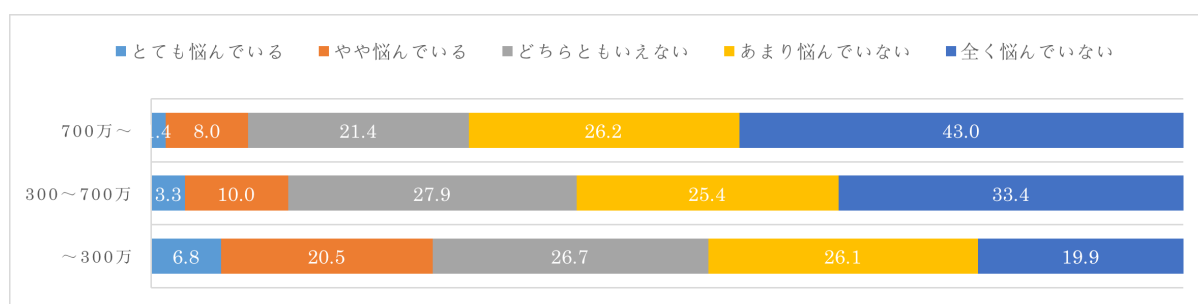
そのうち、「家の経済状況について」では世帯収入による差が顕著です。具体的には、3収入層における悩みを抱えていない(「とても悩んでいる」と「やや悩んでいる」を選んだ)子どもの割合からみると、年間世帯収入が「300万以下」の場合は27.3%、「300~700万」は13.3%、「700万以上」は9.4%となっています。

以上の3項目以外には、性別による差は統計的に有意だとみられる項目がありませんでした。「家族関係」や「家の経済状況について」悩んでいる人の割合が、低い収入階層の子どもの間で高いのは深刻な事態と言わざるを得ませんが、家の世帯収入の違いが「自分の将来」には影響を及ぼしていないことは一つの救いかもしれません。

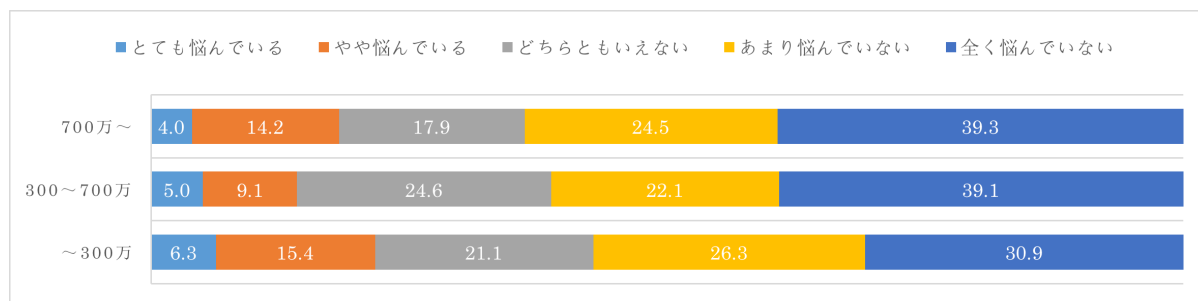
問13-4 家族関係について (p=0.007)



問13-5 家の経済状態について (p=0.000)



問13-6 自分の健康について (p=0.039)



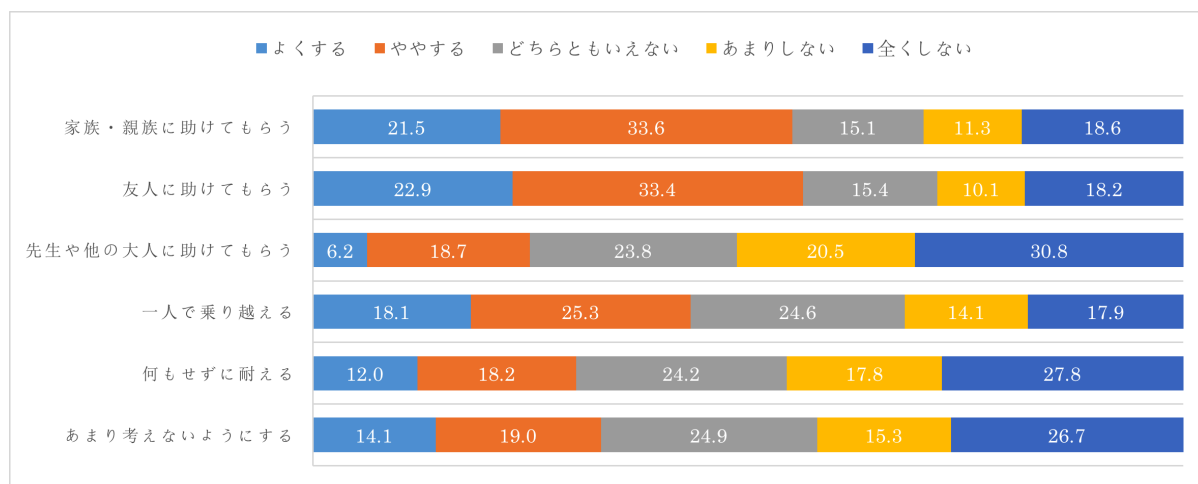
4. 悩んだときの対処

「あなたは大変な問題に直面して悩んだとき、次のようなことをどの程度しますか？」という問いについては、子どもに最も多く選ばれた（「よくする」と「ややする」の割合）のは、「友人に助けをもらう」（56.3%）と「家族・親族に助けをもらう」（55.1%）となっています。その次は、「一人で乗り越える」（43.4%）、「何もせずに耐える」（30.2%）、「あまり考えないようにする」（33.1%）です。

同じ大変な問題に直面して悩んだときに自分以外の誰かに助けを求めるということについて、「先生や他の大人に助けをもらう」という項目においては、「よくする」「ややする」を選んだ子どもはわずか4分の1程度（24.9%）しかいません。この結果からみると、子どもが大変な問題に直面して

悩んだとき、自分一人で乗り越えたり、何もせずに耐えたり、あまり考えないようにしたりすることより、他人に助けをもらうことが多いという傾向がみられています。しかし、「他人」の中で、「先生や他の大人」より、子どもが「家族・親族」や「友人」を信頼している傾向があります。

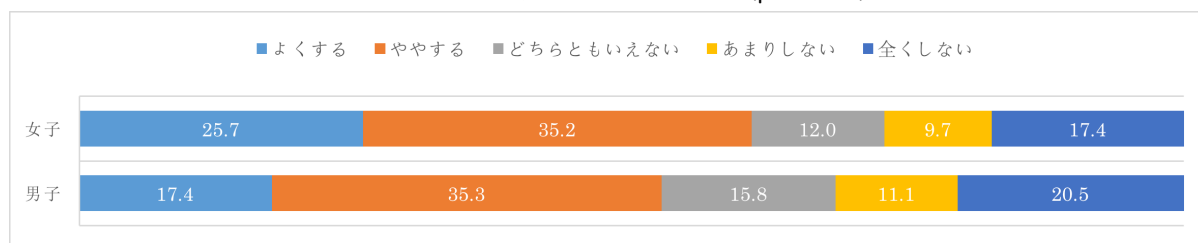
図14 子どもが悩んだ時や大変な問題にあった時の対処 (%)



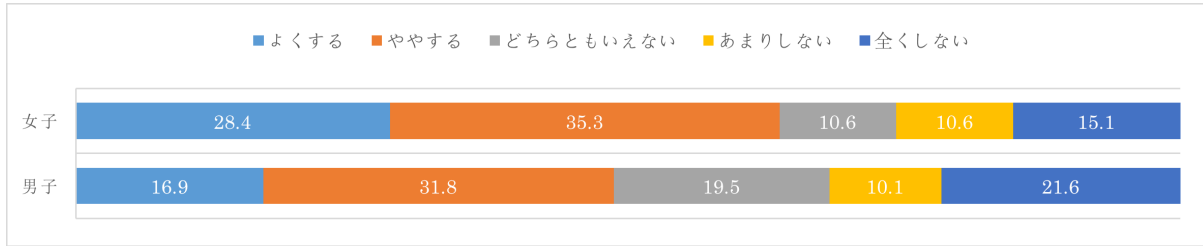
項目	男女別 p値	世帯収入別 p値
家族・親族に助けをもらう	0.028	0.429
友人に助けをもらう	0.000	0.362
先生や他の大人に助けをもらう	0.010	0.024
一人で乗り越える	0.970	0.797
何もせずに耐える	0.164	0.971
あまり考えないようにする	0.199	0.927

悩んだ時の対処に関する6項目の中、性別による統計的に有意な差がみられたのは、「家族・親族に助けをもらう」(p=0.028)、「友人に助けをもらう」(p=0.000)、「先生や他の大人に助けをもらう」(0.010)の3項目です。具体的には、「家族・親族に助けをもらう」と「友人に助けをもらう」において「よくする」と「ややする」を選んだ女子の割合が男子より高くなっています。その一方で、「先生や他の大人に助けをもらう」の中で、「あまりしない」と「全くしない」を選んだ女子の割合が男子より高くなっています。その他の項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

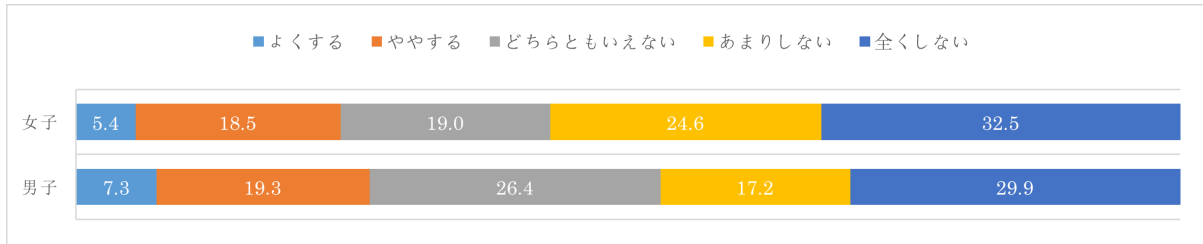
問14-1 家族・親族に助けをもらう (p=0.028)



問14-2 友人に助けてもらう (p=0.000)



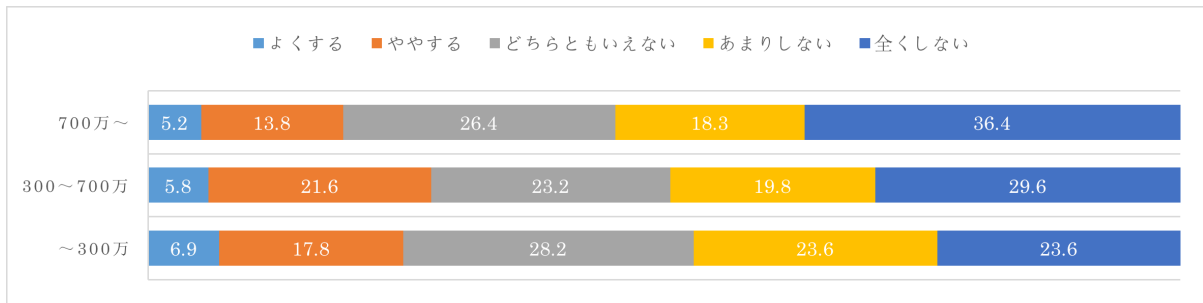
問14-3 先生や他の大人に助けてもらう (p=0.010)



悩んだ時の対処に関する6項目の中、家族世帯収入による統計的に有意な差がみられた唯一の項目は、「先生や他の大人に助けてもらう」(p=0.024)です。「先生や他の大人に助けてもらう」においては、「あまりしない」と「全くしない」を選んだ子どもの割合は、家族世帯収入別からみるとそれぞれの間には差がみられています。具体的には、「700万～」は54.7%、「300万～700万」は49.4%、「～300万」は47.2%となっております。なぜそうした違いが生まれるのかを今後検討していく必要があるように思われます。

その他の項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

問14-4 先生や他の大人に助けてもらう (p=0.024)



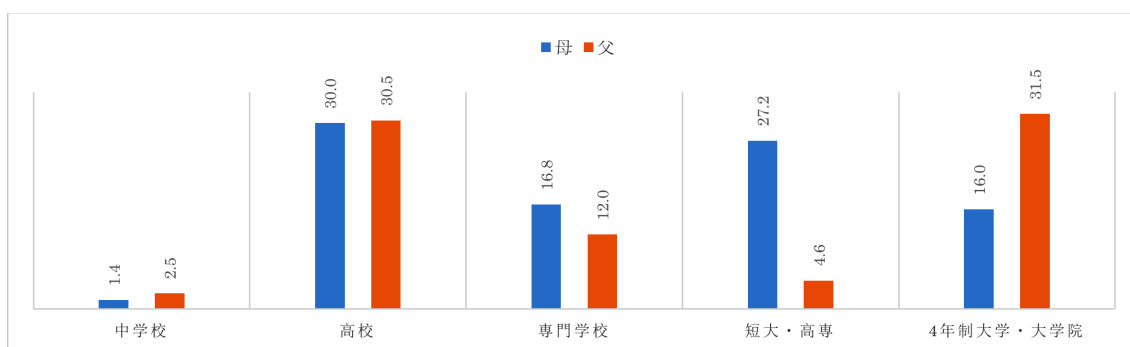
保護者票

1. 家族の基本的な情報

1. 保護者の最終学歴

保護者の最終学歴について尋ねました。母親の最終学歴は、「高校」が最も多く30%、次いで「短大・高専」が27.2%でした。これに対し、父親の最終学歴は「4年制大学・大学院」が最も多い31.5%、次いで「高校」が30.5%でした。

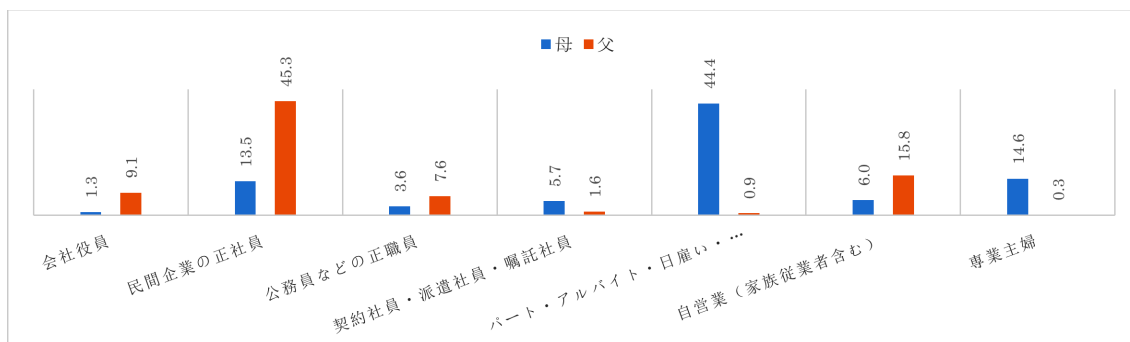
図1 母親と父親の最終学歴 (%)



2. 保護者の職業

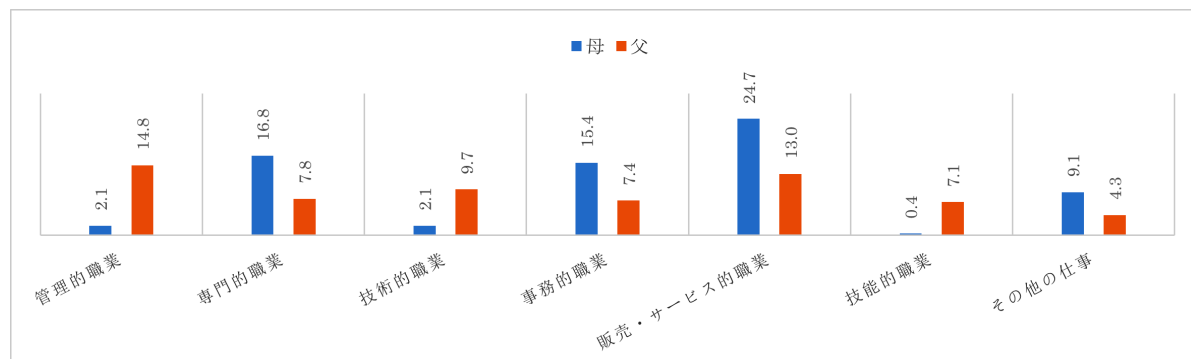
母親と父親の職業について、母親で最も多いのは、「パート・アルバイト・日雇い・非常勤職員」の44.4%でした。続く「専業主婦」は14.6%で、「民間企業の正社員」の13.5%ほぼ同じ割合になっています。父親の職業で最も多いのは、「民間企業の正社員」で45.3%、次いで「自営業（家族従業者を含む）」の15.8%でした。

図2 母親と父親の職業 (%)



母親と父親の仕事の内容について、母親で最も多いのは、「販売・サービスの職業」の24.7%でした。次いで「専門的職業」は16.8%でした。父親で最も多いのは、「管理的職業」で14.8%、次に「販売・サービスの職業」の13%でした。

図3 母親と父親の仕事の内容 (%)



II. 子どもの教育のこと

1. 就学援助費

保護者の方に、就学援助費について尋ねました。回答した保護者のうちの19.9%は就学援助費を受け取っています。京都市における就学援助費認定率は、2015年度で21.9%となっていますので（注）、本調査の回答者は京都市立の中学校に通う児童生徒全体の保護者に比べて、若干、就学援助費受給者を受けていない人に偏っていることがわかります。

注) 京都市保健福祉局「京都市貧困家庭の子ども・青少年対策に関する実施計画」（2016年12月）によります。なお、全国平均は2013年度で15.4%。

表1 就学援助費の受給状況

		人数	%
有効	受け取っている	226	19.9
	受け取っていない	894	78.9
	わからない	13	1.1
	合計	1133	100.0
未記入		26	
総計		1159	

2. 希望教育程度

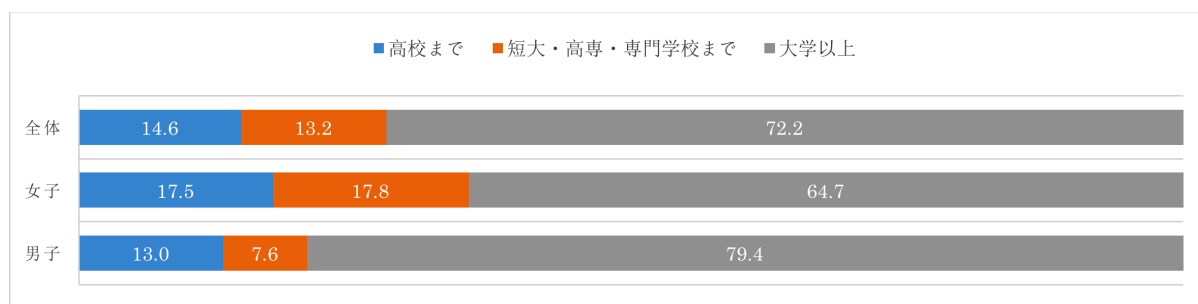
保護者の約15%は子どもに「高校まで」の教育を受けさせたいと考えています。また、約13%の保護者は子どもに「短大・高専・専門学校まで」を、約72%の保護者は子どもに「大学以上」の教育を受けさせたいと考えています。

表2 保護者からみた子どもに受けさせたい教育程度 (%)

	高校まで	短大・高専・専門学校まで	大学以上	実数
希望教育程度	14.6	13.2	72.2	1106

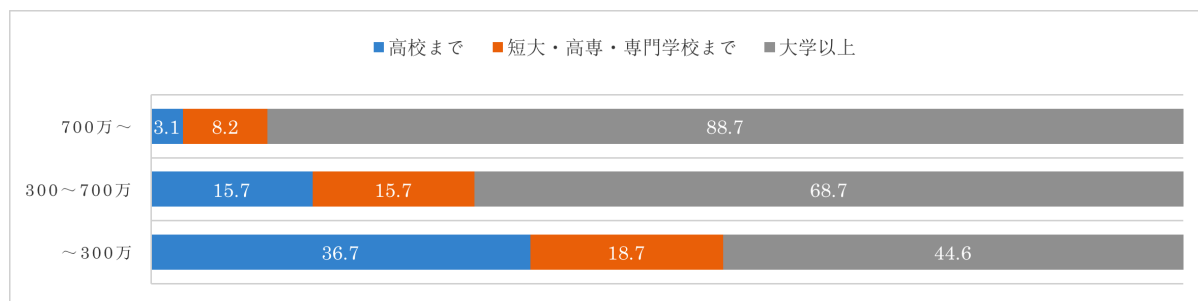
子どもに受けさせたい希望教育程度は、子どもの性別によって大きく異なります。男子をもっている保護者と女子をもっている保護者の子どもに受けさせたい希望教育程度の意識の差は、「高校まで」が4.5%ポイント、「短大・高専・専門学校まで」が9.8%ポイント、「大学以上」が14.7%ポイントとなっています。この差は、男子をもっている保護者が女子をもっている保護者より、子どもに受けさせたい希望教育程度の水準が高いことを示します。

図4 男女別でみた希望教育程度の違い



また世帯収入別にみた子どもに受けさせたい希望教育程度は、収入が高いほど「大学以上」に受けさせたい割合は高くなっています (p=0.000)。世帯収入700万円以上の保護者は「大学以上」に受けさせたい割合は88.7%、世帯収入300万円までのほうは44.6%になり、ほぼ2倍になっています。すでに述べたように、このことは子どもの希望教育程度が保護者の世帯収入によって異なることと照応しています (子ども票のV-2子どもの人生観を参照のこと)。

図5 世帯収入別にみた希望教育程度の違い

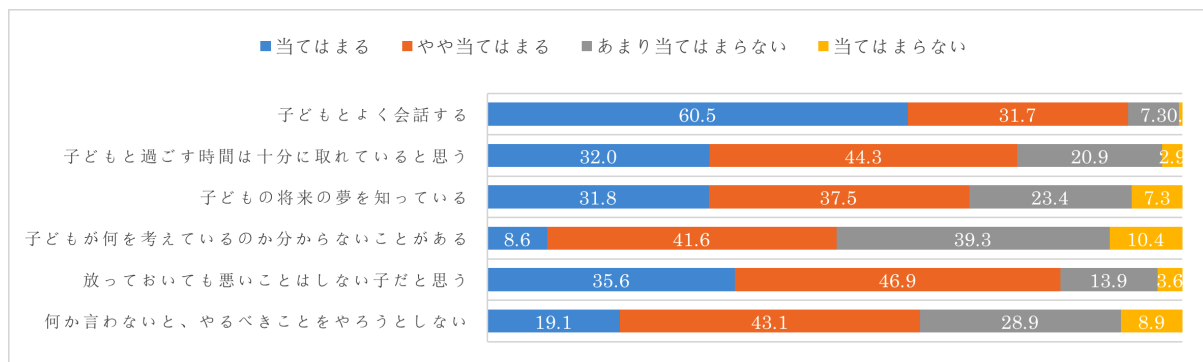


Ⅲ. 子どもとの関係、保護者自身のこと

1. 子どもとの関係

保護者の方に自分の子どもとの関係について、6つの質問をしました。その中で「当てはまる」と「やや当てはまる」に回答した割合が高い順で並べると「子どもとよく会話する」が9割以上、「放っておいても悪いことはしない子だと思う」が約8割、「子どもと過ごす時間は十分に取れていると思う」が7～8割、「子どもの将来の夢を知っている」が約7割、「何か言わないと、やるべきことをやろうとしない」が約6割、「子どもが何を考えているのか分からないことがある」が5割です。最後の2項目を除いて全体的に保護者と子どもの間には良好な関係とコミュニケーションが保たれているといえます。

図6 保護者と子どもの関係



上記の各項目を世帯収入別でみた場合、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。

項目	世帯収入別 p値
子どもとよく会話する	0.098
子どもと過ごす時間は十分に取れていると思う	0.023
子どもの将来の夢を知っている	0.457
子どもが何を考えるのか分からないことがある	0.376
放っておいても悪いことはしない子だと思う	0.000
何か言わないと、やるべきことをやろうとしない	0.240

統計的に有意である項目は「子どもと過ごす時間は十分に取れていると思う」「放っておいても悪いことはしない子だと思う」の2つです。保護者の収入が高いほど子どもと過ごす時間が十分に取れていると考えられており、自分の子どもは放っておいても悪いことしないと信頼する傾向がみられます。

図6-1 子どもと過ごす時間は十分に取れていると思う (p=0.023)

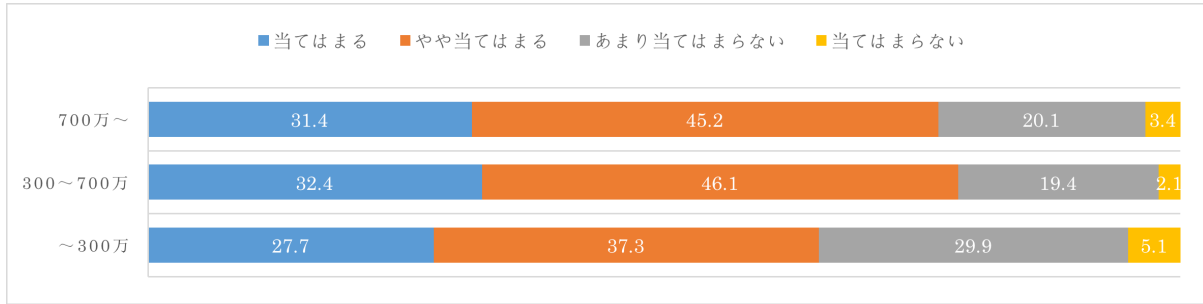
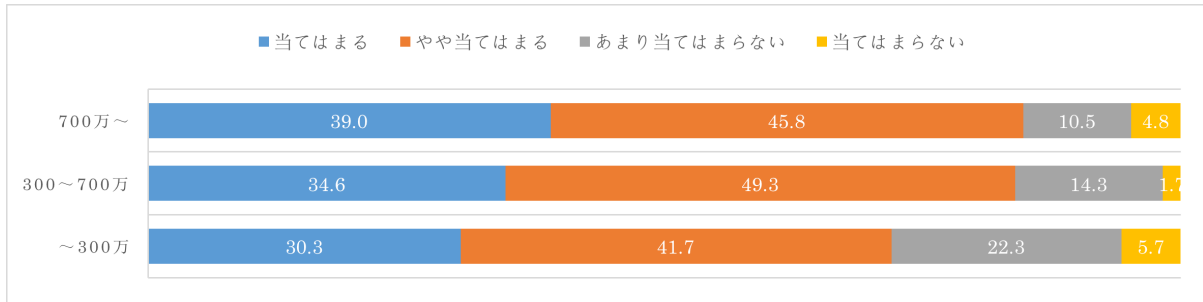


図6-2 放っておいても悪いことはしない子だと思う (p=0.000)

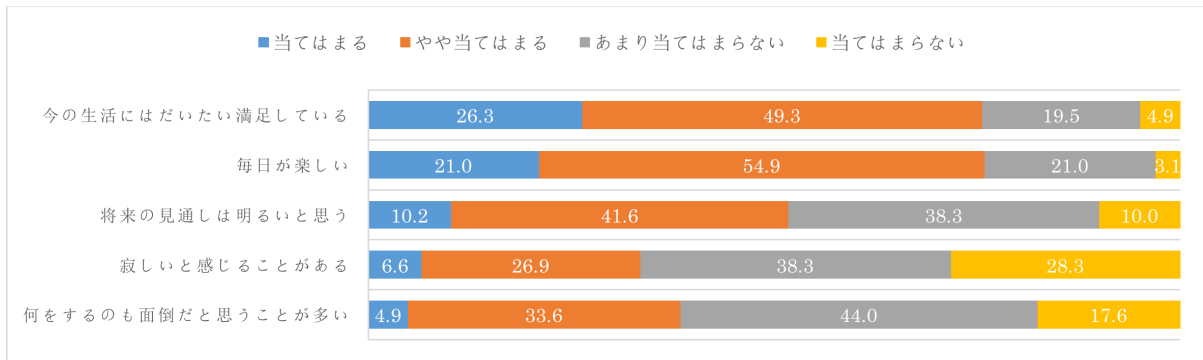


2. 保護者の自分自身に対する意識

保護者の方に自分自身をどう考えているのかについて、5つの質問をしました。まず、生活の満足については、保護者の7～8割（「当てはまる」が26.3%、「やや当てはまる」が49.3%）が今の生活にだいたい満足していることをわかります。「毎日が楽しい」の問いに対しては、7～8割（「当てはまる」が21%、「やや当てはまる」が54.9%）の保護者が「楽しい」と回答しています。将来については、約5割（「当てはまる」が10.2%、「やや当てはまる」が41.6%）の保護者が「明るい」と答えています。

寂しさについては、2～3割（「当てはまる」が6.6%、「やや当てはまる」が26.6%）の保護者が回答しており、7～8割の保護者は寂しさを感じていないことを示します。「何をしても面倒だと思ふことが多い」の問いに対しては、4～5割の保護者が「面倒だ」としています。今の生活に関してや将来についてそれほど悲観的ではありませんが、「寂しい」と「面倒」と感じる人の割合がやや多いのが気にかかります。

図7 保護者の自分自身に対する意識



上記の各項目を世帯収入別でみる際、それぞれの項目の有意確率は下表のようになります。「何を
 するのも面倒だと思ふことが多い」以外は統計的に有意です。

項目	世帯収入別 p値
今の生活にはだいたい満足している	0.000
毎日が楽しい	0.000
将来の見通しは明るいと思う	0.000
寂しいと感じることがある	0.003
何をするのも面倒だと思ふことが多い	0.115

生活にだいたい満足している保護者の割合は世帯収入700万円以上が88.2%、300万円未満のほう
 は50.5%が満足しており、その差はほぼ1.5倍になっています。「毎日が楽しい」の問いに対しては
 700万円以上が82.5%、300万円未満が59.9%でその差はほぼ1.5倍になっています。将来について
 肯定的な回答の割合は700万円以上が69.2%、300万円未満が32.4%になり、その差はほぼ2倍に
 なっています。寂しさを感じる割合をみると700万円以上は27.1%、300万円未満は43.2%になり、
 その差はほぼ1.5倍になっています。つまり、世帯収入が高いと自分自身に対する意識が肯定的で、
 生活満足度が高く、将来の見通しを明るいものと考えていることがわかります。

世帯収入が300万円未満の場合、生活に満足している人の割合はちょうど5割で、「将来の見通し」
 についてもそれほど明るいものと考えていない人の割合が約68%に達していることが注目されます。

図7-1 今の生活にはだいたい満足している (p=0.000)

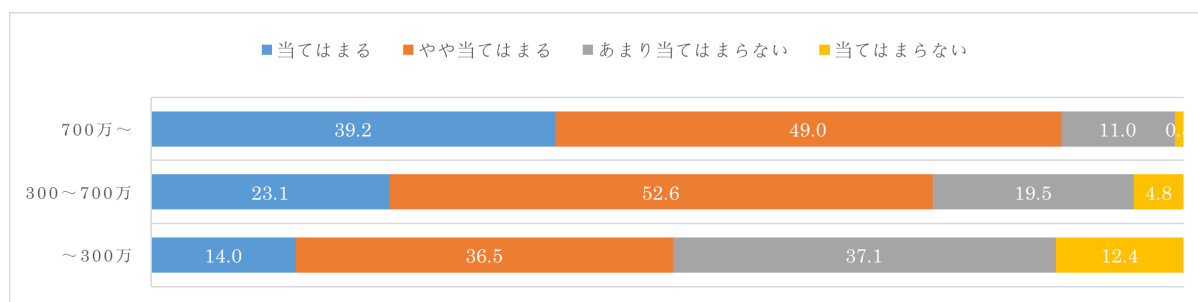


図7-2 毎日が楽しい (p=0.000)

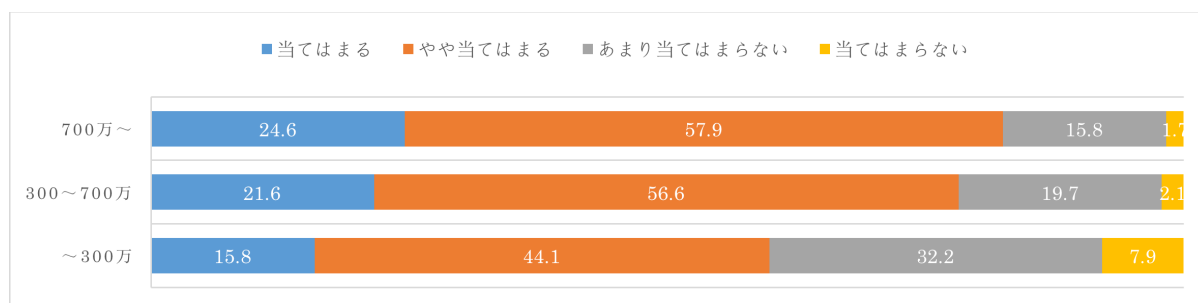


図7-3 将来の見通しは明ると思う (p=0.000)

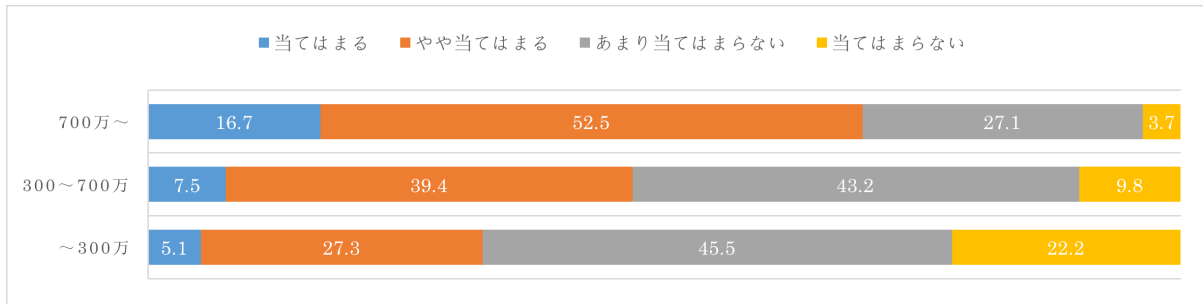
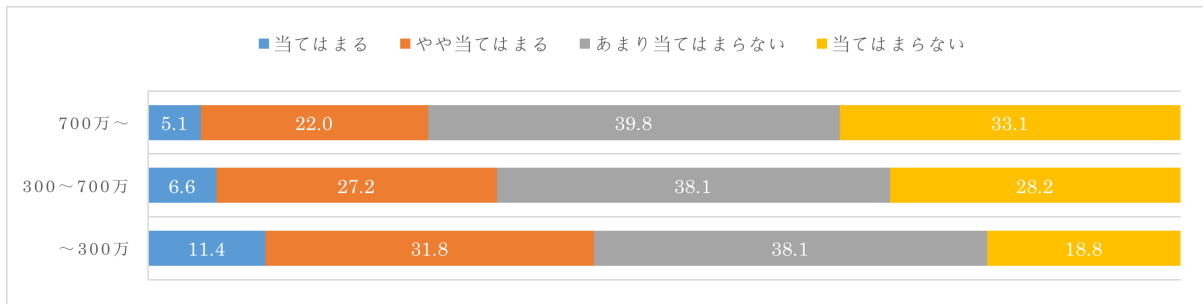


図7-4 寂しいと感じることがある (p=0.003)

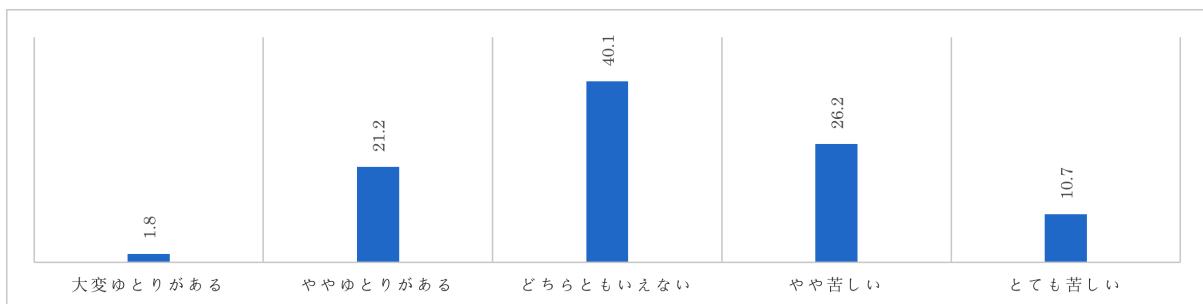


IV. 家の暮らし向き

1. 暮らしのゆとり

暮らしのゆとりについては、「大変ゆとりがある」とした世帯はほとんどなく、1.8%でした。一方で、「やや苦しい」が26.2%、「とても苦しい」が10.7%であり、約4割の世帯が比較的暮らしにゆとりがないと答えています。

図8 現在の暮らし向きに関する考え方 (%)



2. 手当・給付等

世帯収入のうち、子ども手当（児童扶養手当の合計）、その他の公的給付（年金・生活保護等の合計）、利子・配当金（個人年金の合計）の年間額について、その平均値、中央値、最大値は下記の表のようになっています（単位：円）。

子ども手当・児童扶養手当の合計(年間)	
有効	775
欠損値	384
平均値	209082.5
中央値	120000
標準偏差	186897.7
最大値	1200000

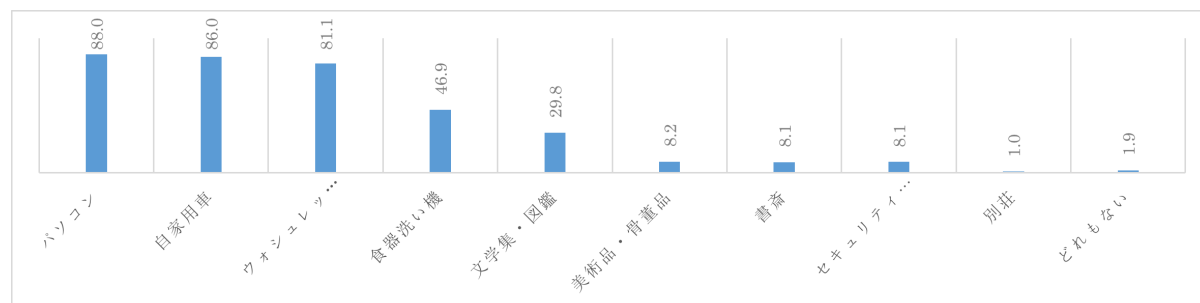
その他の公的給付 (年金・生活保護等)の	
有効	495
欠損値	664
平均値	63830.3
中央値	0
標準偏差	300297.7
最大値	2400000

利子・配当金 個人年金の合計(年間)	
有効	469
欠損値	690
平均値	13147.1
中央値	0
標準偏差	76387.9
最大値	1000000

3. 所有物（複数回答）

約9割の世帯はパソコン、自家用車を所持しています。ウォシュレット・トイレも8割以上の世帯が所持しています。これらより所持率が低くなるのが食器洗い機で、約半数の世帯にあります。さらに低いのは文学集・図鑑で、約3割の世帯に留まります。美術品・骨董品、書斎、セキュリティ・サービス、別荘の4項目については、9割以上の世帯がもっていないと回答しました。

図9 所有物の状況 (%)



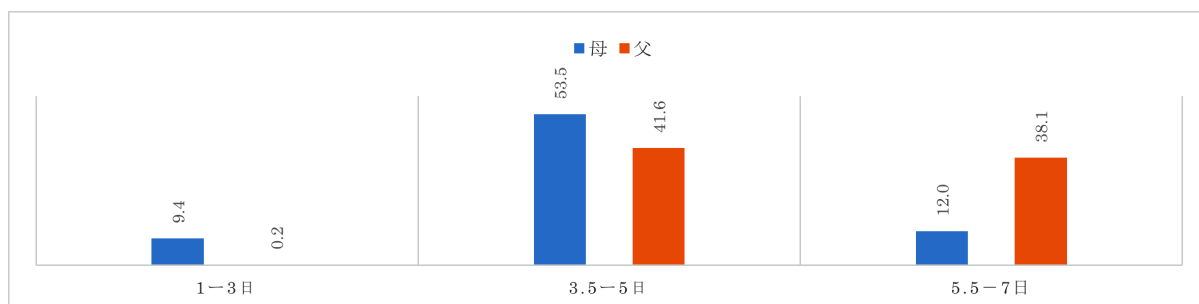
付録

1. 母親の労働日数と勤務時間

・ 母親の1週間当たりの労働日数

働いている母親の1週間当たりの労働日数を尋ねました。5日働く人の割合が最も多く36%、次いで4日の12.8%でした。3日までの割合が9.4%、3.5日から5日までの割合は53.5%、5.5日から7日の割合は12%でした。

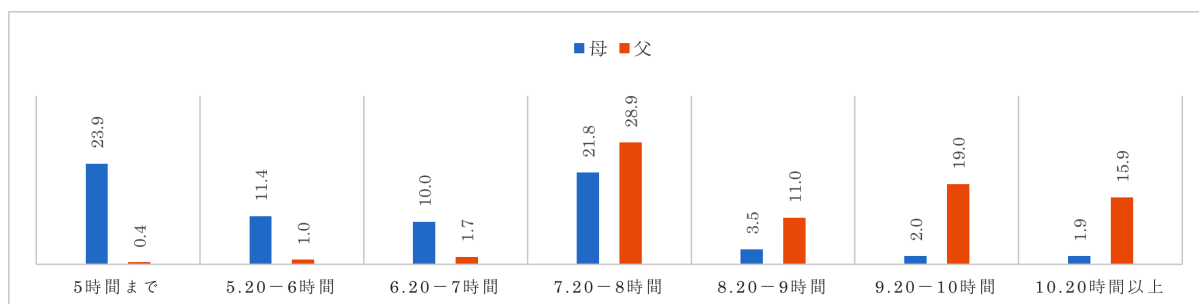
図付1 母親と父親の1週間当たりの労働日数 (%)



・ 母親の平日の勤務時間

働いている母親の平日の勤務時間について、母親の勤務時間は8時間までが最も多く、働く母親の全体の67.1%を占めます。

図付2 母親と父親の平日の勤務時間 (%)



・ 母親の夜勤の有無

母親の夜勤の有無について、夜勤があると答えた母親は6.5%、ないと答えた母親は64.5%でした。

表付1 母親と父親の夜勤の有無

	母	父
あり	6.5%	15.9%
なし	64.5%	60.1%

- ・ 母親の土曜出勤の有無

母親の土曜出勤の有無について、あると答えた母親は41.2%、ないと答えた母親は32.5%でした。

表付2 母親と父親の土曜出勤の有無

	母	父
あり	41.2%	58.0%
なし	32.5%	20.7%

- ・ 母親の日祝日出勤の有無

母親の日祝日出勤の有無について、あると答えた母親は29.2%、ないと答えた母親は44.6%でした。

表付3 母親と父親の土曜出勤の有無

	母	父
あり	29.2%	42.4%
なし	44.6%	35.7%

2. 父親の労働日数と勤務時間

- ・ 父親の1週間当たりの労働日数

働いている父親の1週間当たりの労働日数を尋ねました。5日働く人の割合が最も多く40.3%、次いで6日の28.7%でした。1日から3日までの割合が0.2%、3.5日から5日までの割合は41.6%、5.5日から7日働く人の割合は38.1%でした。（図付1を参照）

- ・ 父親の勤務時間

働いている父親の平日の勤務時間は8時間までが最も多く、全体の32.1%を占めます。平日の勤務時間で次に多いのは10時間で18.2%、10時間以上働く人の割合は34.1%に上り、長時間労働をおこなっている人も多いことがわかります。（図付2を参照）

- ・ 父親の夜勤の有無

夜勤があると答えた父親は15.9%、ないと答えた父親は60.1%でした。（表付1を参照）

- ・ 父親の土曜出勤の有無

父親の土曜出勤の有無について、あると答えた父親は58%、ないと答えた父親は20.7%でした。（表付2を参照）

- ・ 父親の日祝日出勤の有無

父親の日祝日出勤の有無について、あると答えた父親は42.4%、ないと答えた父親は35.7%でした。（表付3を参照）

考察

本調査は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「自己肯定感に注目した子どもの『貧困に抗う力』育成のためのサポートシステムの構築」(研究代表者 埋橋孝文同志社大学教授、平成27～29年度)の一環として企画、実施されました。

集計結果の要約と示唆するもの

子ども票から

・ 親との関係について

子どもからみた親との関係については、多数の子どもが肯定的な回答(「当てはまる」「やや当てはまる」)をしています。「親は自分を大事にしてくれていると思う」「親とよく話をする」という項目に対しては、肯定的な回答の割合が93.2%と89.1%となっています。一方で、「親は自分の意見をよく理解してくれている」については、「どちらともいえない」28.4%、「あまり当てはまらない」7.7%「当てはまらない」3%となっています。子どもは「親が自分を大事にしてくれている」と思いながらも、「自分の意見をよく理解してくれているか」という点では、肯定的な回答の割合がやや低くなっています。

男女差では、女子の方が親との関係について肯定的な評価が多くなっています。ただし、「親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている」については、男子の方が当てはまると考えている割合が女子よりも高く、また、世帯収入が高いほど「当てはまる」「やや当てはまる」と答えた割合が高くなっています。「親は自分を必ず大学まで行かせたいと思っている」は保護者調査の結果と符合していません(保護者票のII-2希望教育程度を参照)。そうした違いがありますが、全体的にみると、子どもが考えている「親子関係」には世帯収入の高低が関係していないことが明らかになりました。

・ 家族について

「家族の中に、なんでも相談できる人がいる」という項目に対する肯定的な回答(「当てはまる」「やや当てはまる」)の割合が56.6%でした。これに対して、「どちらともいえない」と答えた子どもが22.7%、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と答えた子どもも20.6%となります。なかでも、男子のほうが女子より否定的な回答(「あまり当てはまらない」「当てはまらない」)の割合が高いことに注意が必要です。

「小学生の頃、よく家族旅行に行った」と「家には本がたくさんある」については、世帯収入が高いほど「当てはまる」「やや当てはまる」の割合が高いことが明らかになりました。子どもにとって享受できる有意義な「機会(時間)」と「文化的資源」が家の経済状況によって違いがあるというこ

とを示しており、いろいろ考えさせる結果となりました。ただし、その一方で、朝食や夕食の習慣や「家族のなかに何でも相談できる人がいる」について世帯の収入の違いが影響を及ぼしていないことも注目されます。

・ 子どもの「毎月自由に使えるお金」と持ち物

子どもは毎月平均2117円（男子1869円、女子2287円）を自由に使えると回答しています。世帯収入による差はなく、性別による差は統計的に有意でした。自分の部屋や専用の勉強机については世帯収入の高い家の保有率が高い結果となっていますが、持ち運びできる服やゲーム、携帯電話、スマートフォンなどには家庭の経済状況は影響しておらず、「家の収入とは無関係に普及している」ことがわかります。今後の課題としては、世帯の収入の高低によって保有率に差が出た「自分の部屋」と「専用の机」が学業にどのような影響を与えるのか、与えないのかについて検討することが挙げられます。

・ 学校生活について

「当てはまる」としている割合が最も高い項目は「部活動に熱心に取り組んでいる」（45.1%）と「学校は楽しい」（40.7%）であり、多くの子どもが学校生活を楽しんでいることがわかります。

また、「自分の居場所が無いと感じることがある」については、「あまり当てはまらない」（25.0%）、「当てはまらない」（36.3%）で全体の61.3%で、過半数が学校を居場所として感じていることに注目したいところですが、その以外の子ども（女子2割強、男子1.5割）がなぜ学校に居場所がないと感じているのかは考えなければなりません。

世帯収入別にみると、「成績はいいほうだ」、「授業が難しくついていけないことがある」、「クラスのみならずから好かれていると思う」の項目で有意な差がみられました。つまり、「成績はいいほうだ」と「クラスのみならずから好かれていると思う」の項目では、世帯収入「～300万」の子どもで「当てはまらない」の割合が高くなっています。また、「授業が難しくついていけないことがある」という項目では、世帯収入「～300万」の「当てはまる」の割合が高くなっています。

以上のことから世帯収入は子どもの学校生活に影響を与えていることがわかります。ただし、全体の3分の2が「学校は楽しい」と答えており、そのことには世帯収入の高低による差がないこと、「先生の評価（相談を聞いてくれる、尊敬できる、頼れる）」についても世帯収入による差がないことも注目されます。男女別では女子の方が、「授業の難しさ」と「学校に行きたくない」「居場所がない」などの回答割合が多いことがわかりますが、なぜそうなるのか、どうすればそうでなくなるようになるかを今後考えていく必要があります。

・ 習い事について

世帯収入によって、習い事に差がみられることが注目されることです。

「習い事の状況」の項目では「どれもしていない」と答えた世帯収入「～300万」（27.2%）の割合は他の世帯収入と比べて高い割合を占めます。また、学習塾（45.7%）については他の世帯収入と比べて低い割合を占めます。低い世帯収入の子どもは「成績がいい方だ」に「当てはまらない」と答えた割合が高く、また、「授業が難しい」ことに「当てはまる」と答えた割合が高くなっていますが（II-1学校生活を参照）、それにはこうした学習塾に通っている割合が低いことも影響しているのではないかと考えられます。

世帯収入によって差がみられる習い事や場所への子どもの居場所があるかも知れません。家計の事情により、習い事をしていない子どもの居場所について考える必要がありそうです。

・ 地域行事への参加について

自治会などが地域で行う行事のなか、「お祭り」、「クリスマス会」と「スポーツ大会」の順に、その参加割合が高くなっています。しかも、男子と女子を比べると、女子は男子に比べ「お祭り」「クリスマス会」に参加した割合が高く、これは統計的に有意です。ただし、全ての項目の行事参加には世帯収入による差は統計的に有意ではなく、世帯の収入差による地域行事への参加への影響がないという結果を得ました。

・ 暇なときに行く場所について

暇なとき、よくいく場所は「スーパー・コンビニ」が23.1%と一番高く、次に「本屋」19.1%になっています。一方、全く行かない場所の割合が一番高かったのは「青少年活動センター・児童館など」(75.3%)、次は「図書館」(59.1%)でした。男子は女子に比べ「公園」「ゲームセンター」に「よく行く」割合が高くなっています。これに対して、女子は男子に比べ「図書館」「本屋」「飲食店」に行く割合が高くなっています。世帯収入別で見ますと、「飲食店」の項目で収入による差は統計的に有意です。「～300万」の世帯は「あまり行かない」と「全く行かない」を合わせた割合が一番高くなっています。その背景に経済的な問題があるのかどうかは断言できませんが、友人と過ごす機会や時間がそのことによって制約を受けているとしたら、注意を払う必要があります(IV-2 友人との関係を参照のこと)。

・ 友人について

友人について、全体的に、「同じ学校の友人」が「たくさんいる」割合が一番高く、次に割合が高いのは「幼い頃(小学校3年生頃まで)からの友人」になっています。男子は女子に比べ「同じ学校の友人」「違う学校の友人」がたくさんいる割合が高くなっています。これに対して、女子は男子に比べ「何でも相談できる友人」「家に呼ぶ友人」がたくさんいる割合が高くなります。世帯の収入別で見たところ、「同じ学校の友人」、「幼い頃からの友人」の項目について、収入によって統計的に有意な差が出ました。世帯収入が高くなるほど、「同じ学校の友人」「幼い頃からの友人」が多くなっています。ただし、なぜこうした違いが生じるのかを明らかにすることは今後の検討課題です。

・ 友人との関係について

友人との関係について、「自分は友だちに好かれていると思う」「自分は周りの友だちより金銭的に恵まれていると思う」の2項目について世帯収入が高くなるほど、「当てはまる」割合は高くなっています。友人との関係の3項目すべてについて男女による差はありませんでした。

中学2年生は自分の家庭の経済状況にある程度認識できていることがわかります。家庭の経済状況に対する認識は子どもの友人関係に影響を与えていることに注意が必要です。

・ 自己肯定感について

調査の集計結果から以下の3点がわかりました。

第1に、子どもの「自分評価」が結構厳しいことがわかりました。というのも「今の自分に満足している」割合が3割にとどまり、「自分はダメな人間」、「自分の性格で嫌だと思うことが多い」のそれぞれを5割以上の子どもが程度の差はあれ肯定しているからです。今後、「満足していない」理由を究明していくことが大事です。また、「人に負けない得意分野」「人の役に立てる」ことを今以上に促進していくことが必要でしょう。

第2に、子どもの自己肯定感は、性別と関係しています。特に「今の自分に満足している」「自分には負けない得意分野がある」「自分の性格でいやだと思うことが多い」という3項目では、性別による差は統計的に有意です。この3項目では、男子は女子より、自己肯定感が高いという傾向がみられます。なお、自己肯定感がなぜ男女で違いがみられるのかは今後明らかにしていくべき課題です。

第3に、子どもの自己肯定感は、世帯収入と関係していないことがわかりました。問13の全ての項目で世帯収入による差は統計的に有意ではありませんでした。家族と旅行に出かけた経験や家にある本の数（Ⅰ-2）、専用の部屋や机（Ⅰ-5）、成績や授業の難度（Ⅱ-1）、習い事（Ⅱ-2）、友人との関係（Ⅳ-2）など多くの項目に家庭の世帯収入差が影響を及ぼしていましたから、それらが生徒の自己肯定感にも何らかの影響を及ぼしているのではないかと予測されたのですが、事実は異なっていました。とするならば子どもの自己肯定感は何によって決まるかを突き止める必要がありますが、それは今後の検討課題です。京都市の教育の特徴や先行するほかの全国調査・地方自治体ごとの調査結果との異同を踏まえながら総合的に検討していく必要があります。

・ 貧困、金銭、競争、将来などに関する意識について

調査の集計結果からみると以下の3点がわかりました。

第1に、全体的な集計からみると、子どもは、貧困、金銭、競争、将来に関する意識についてはっきりしていない場合が多いことがわかりました。例えば、本問の8つの項目のいずれにおいても、3割程度の子どもの「どちらとも言えない」を選んでいました。この割合は、子どもの主観意識に関する問い（13～15）の諸項目の中で比較的高くなっています。

第2に、貧困と個人努力、競争と不幸の関係性に関する2つの項目においては、性別による差があることがわかりました。男子の方が女子より「両者に因果関係がある（個人の努力が足りないから貧困になる、競争で負ければ不幸になる）」と考える傾向がみられます。

第3に、子どもがもつ大学まで進学する意欲は、世帯収入によって差があることがわかりました。世帯収入が高いほど、子どもの進学意欲が強いことが示されています。逆にみれば、経済生活や貧困に関する「人生観」を示すその他の7つの項目で世帯収入による違いがみられなかったことも今回の調査で明らかになった点です。すでに、自己肯定感には世帯の収入がほとんど影響していないことをみましたが（Ⅴ-1）、同じことは「人生観」についても当てはまる結果となっています。

・ 子どもが抱えている悩みについて

調査の集計結果からみると以下の3点がわかりました。

第1に、全体的な集計からみると、「自分の健康」以外には、ほとんどの子どもは「家族関係」「経済状況」「友人関係」などという「自分を取り巻く環境的な事から」に比べて、「勉強」「自分の将来」のような「自分自身のこと」で悩んでいる、という傾向がみられます。

第2に、「友人関係」「勉強」「自分の将来」においては、女子は男子より悩んでいることがわかりました。特に「友人関係」に対して、「悩んでいる」と選んだ女子の割合は男子の割合の2倍を超えています

第3に、「家族」に関する悩み事は世帯収入と関係していることがわかりました。集計結果からみると、世帯収入が低いほど、子どもが「家族関係」や「家の経済状況」などに対する悩みが多くなっています。先にみたように世帯収入の違いは子どもの自己肯定感や「人生観」には影響していませんが、こうした家族に関する悩みに影響していることが注目されます。ただし、世帯収入の違いは「自分の将来について」の悩みに影響しているわけではありません。

・ 子どもが悩んだ時の対処について

調査の集計結果からみると以下の3点がわかりました。

第1に、全体的な集計からみると、子どもが大変な問題に直面して悩んだとき、自分一人で乗り越えたり、何もせずに耐えたり、あまり考えないようにしたりすることより、他人に助けをもらうことが多いという傾向がみられます。しかしながら、「他人」の中、「先生や他の大人」より、子どもが「家族・親族」や「友人」を信頼している傾向があります。

第2に、悩んだときに、女子は男子より「家族・親族」や「友人」に助けをもらう割合が高くなっていますが、男子の方は女子より「先生や他の大人」に助けをもらう割合が高くなっています。

第3に、「先生や他の大人に助けをもらう」という項目においては、世帯収入による差があることがわかりました。つまり、世帯収入が高いほど、そうしない場合が多くなっています。なぜそうした傾向がみられるのかは今後解明すべき点です。

保護者票から

・ 就学援助費について

今回の調査回答者のうち就学援助費を受けている保護者の割合は19.9%で、京都市全体の数字(21.9%、2015年度)をやや下回っています。

・ 希望教育程度について

子どもの性別や世帯収入によって子どもに受けさせたい希望教育程度の意識の差がみられます。まず、子どもの性別でみると、女子より男子をもっている保護者の方がより高い水準の教育程度まで受けさせたいと回答しています。また世帯収入が高ければ高いほど、「大学以上」と答えた割合が高くなり、その差は300万円未満が44.6%、700万円以上が88.7%でほぼ2倍です。この結果は、すでにふれたように子どもに聞いた結果(V-2)と同じ傾向を示しており、2つの結果は照応しています。

・ 子どもとの関係について

保護者からみた子どもとの関係については、多数の保護者が肯定的な回答(「当てはまる」「やや当てはまる」)をしています。子どもと話しをしていると肯定的に答えた保護者は9割以上で、「放っておいても悪いことはしない子だと思う」問いに対しても約8割が放っておいても悪いことはしないと答えています。また子どもと過ごす時間が十分に取れていると回答した保護者は7~8割で、子どもの将来の夢を知っている保護者は6~7割です。

全体的には、保護者と子どもの間には良好な関係とコミュニケーションが保たれているといえます。ただし、「子どもが何を考えているかわからない」と「言わないとやるべきことをやろうとしない」という2点で不満をもつ保護者の割合が多くなっています。

「子どもと過ごす時間は十分に取れていると思う」「放っておいても悪いことはしない子だと思う」という2つの項目では世帯収入別に有意な差があり、保護者の収入が高いほど子どもと過ごす時間が十分に取れていると考えられて、自分の子どもは放っておいても悪いことしないと信頼する傾向がみられます。

・ 保護者の自分自身に対する意識について

「今の生活にはだいたい満足している」「毎日が楽しい」「将来の見通しは明るいと思う」という質問に対しては半数以上が肯定的に答えており、「寂しいと感ずることがある」「何をするのも面倒だと思うことが多い」という質問については半数以上が否定しています。今の生活や将来についてそれほど悲観的ではありませんが、「寂しい」と「面倒」と感ずる人の割合がやや多いのが注目されます。

また、「今の生活にはだいたい満足している」「毎日が楽しい」「将来の見通しは明るいと思う」「寂しいと感ずることがある」の回答では、世帯収入別に有意な差が認められ、世帯収入が高いほど今の生活を肯定する回答の割合が高くなっています。つまり、世帯収入が高いと自分の生活に対する意識も肯定的であることがわかります。